
世界は僕の手で滅びる

純国産茶封筒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は僕の手で滅びる

【Nコード】

N0600M

【作者名】

純国産茶封筒

【あらすじ】

その日、少年は勇者になる。その日、少女は弟子になる。その日、彼らは魔王討伐の命を受け、その日、彼らは旅に出る。最強にならない勇者の少年、白衣を纏った弟子少女、全てを化かす赤色の狐。奇妙絶妙な面々が贈る、世界を滅ぼすための旅。

《旅空蟬》の章 1 (前書き)

この物語には殺伐とした応酬が多く含まれます。
ドタバタ日常系の物語をご希望の方はご注意ください。

《旅空蟬》の章 1

蟬がけたたましく鳴いていた。じりじりと、頭上の太陽が地上を焦がす。辺りには、無造作に生える無数の雑草と、赤煉瓦で出来た無骨な街道しか存在しなかった。かつては草原の街リテネへの正確な道筋として、さる筋の商人たちが意気揚々と往き来していたその街道も、リテネの産業の沈静化に応じ、自然と人の通りは減っていた。地を這う大蛇のように背を伸ばすその姿は、今となっては、この地域の夏がいかに灼熱地獄であるかを旅人たちに知らしめる、一種のシンボルと化している。

そして今日もまた、何も知らぬ哀れな旅人たちが、草原の帯びる熱に悩まされていた。

「水がほしい」

「唾液で我慢してください」

リテネへと続く長い長い街道の中途。一組の若い男女が、肩を並べて歩いていた。正鵠を射るならば、男の方の肩は、絶望を前にしているかのようにがっくりと落ち込んでいた、と表現した方が良いかもしれない。

男女共に、未だ少年少女の域を出ない顔つきをしており、少年は茶色のTシャツに黒い短パンという極めて動きやすそうな服装をしていた。短く切った黒髪が太陽の光を眩しく反射している。対し少女の方はと言えば、何がどうしてこうなってしまったのか、科学の実験で用いる純白の白衣を一身に纏い、その上で楽しげに微笑んでいる。汚れ一つ無い美しい白髪は少女の腰あたりまで伸び、ポニーテールの要領で結ばれていた。どこをどう見ても気が触れてしまっているとしたか考えようが無い。が、少女の行動は常に一般人そのものであり、突飛な行動に出ることはほとんど無かった。唯一問題であるその言語センスは、この世における常識の一線を遙か昔に踏み越えてしまっており、今の彼女の思考を理解することは困難を極め

る。

「アノ、少しいいかい」

「なんでしょうか、師匠」

少年の声に応じ、アノと呼ばれた少女が反応を示した。その少女から師匠と呼ばれた少年は、ふと顔を上げ、頭上の太陽を仰ぎ眼を瞑った。

「リテネまで、後どのくらいかかるかな？」

「辿り着けないんじゃないんですかね」

「寝言はくたばってから言えよ。……確か、城を出る前に、ここら一帯の地図は貰ってきただろ？」

「ああ、ありましたねえ」

「どうして他人事なんだよ」

少年の静かな怒りのこもった言葉を、アノは飄々として受け流す。とても師弟の会話とは思えなかったが、これが彼らの日常の応酬であった。

少年は一つため息をこぼし、それから吐き捨てるように言葉を続ける。

「仕方ないな。アノ、水をくれ」

「胃液で我慢してくださいよ」

「……俺を溶かすつもりか？」

「嫌ですね、いつも塩を舐めては縮んでるくせに」

「俺はいつからナメクジになった！」

少年は語調を荒げ、そして、息も絶え絶えに肩を落とした。その様子を、アノは涼しげに眺めている。

彼らの進む道の先に、未だリテネの姿は見えない。

この物語は、勇者である筈の少年ユギと、その弟子である筈の少女アノが、この世界を滅ぼす為に旅をする、その奇妙な旅の記録の一部始終である。

《旅空蟬》の章 1（後書き）

彼と彼女が旅する世界に名前はありません。読者様の想像に一任します。

後書きでは、世界設定やその他設定などを短く語ろうかと。基本読み飛ばしてくださいでも構いませんが、頭の片隅程度に留めておくと幸せになれるかもしれません。

蝉が騒々しく鳴いていた。リテネの夏は暑い。近年温暖化の傾向にあると言われるこの星だったが、事実そこまで外温の変動は無いらしい。しかしこれは旅の吟遊詩人が歌に乗せて語っているだけなので、そう信憑性があるのかどうかも曖昧な所だ。

その日の夕刻、ユギとアノは、必死の思いで草原の街リテネへと到達した。到着直後、文字通りユギはゾンビのように新鮮な水を求めて声にならぬ呻きをもらして、その凄惨たる姿は、いかにこの道程が過酷であったかを切実に物語っていた。

それから、親切なご夫婦に水分を補給させてもらった後、ユギとアノはリテネの一角に建つ小さな宿屋に入った。アノは最初ユギと別の部屋を要望したが、金銭面に余裕が無いことは彼女も把握しており、数分のユギの説得の末、同じ部屋で睡眠を取る事を承諾した。部屋はそこそこ広く、ゆっくりとくつろげる程度の空間は確保されていた。二つ並んだベッドも、小さいながらもしっかりと作られている。ユギはベッドにかけられたシーツの上に腰を落とし、深くため息を吐いた。

「お疲れのようですね」

アノが声をかけてくる。眼を向けると、彼女は依然白衣を身に纏ったまま、ベッド脇に置かれている椅子に腰掛けていた。彼女の背後には大きな窓があり、そこからリテネの外観を一望できるようだった。

「まあ、そりゃね」ユギは再び眼を落とし、言葉を返す。「こんなへんちくりんな弟子がいれば、疲れるさ」

「失礼ですね。私はそれでも精一杯生きてるんです」

「ふうん。そういう風には見えないけど」

「そりゃいつも全力で手を抜いてますから」

「お前少しは自分の発言に責任を持てよ」

そう突っ込みながら、ユギは脳内で自身の発言を顧みる。自分が正直な人間だとは考えていないが、それでもそれなりに真面目に生きていくつもりである。こんな大変な事に巻き込まれてしまっている、彼は元来の性格のせいで、全てを投げ出すつもりにはなれなかった。ただ一つ誤算だったのは、最終的にアノを巻き込む形になってしまったことだ。これは彼女自身が望んだことだから、仕方ないことなのかもしれないけれど。

そんな事を考え込むユギの様子を眺めていたアノは、やがて、神妙な顔つきで言葉を発した。

「師匠、一つ聞きたいことがあります」

「うん？」

ユギは顔を上げる。そしてその顔が、アノの表情を見るなり、げんなりとしたものに一変した。アノが神妙な顔をしていると、大抵意味の分からない話題を振ってくる。これは、彼自身アノと接していて学んだことの一つである。

しかし彼の予想に反し、神妙な顔をしたアノが口にしたその疑問は、珍しくまともな内容であった。

「どうして、ガンアの国王さんは、師匠を勇者に任命したんでしょう」

「何故って……」

ユギは当然返答に詰まった。それはアノが真面目な話を持ちかけてきたことに動揺しているのもあったが、それ以前に、ユギはその疑問に対し答えるべき言葉を知らなかったのだ。

ガンアは、ユギを勇者と任命し、魔王を倒す旅を開始させた国である。大量の魔物を従え、国政国内情勢共に一切不明とされている事から、近隣の国につけられた異名は「魔国」。

数十の国が林立する現在の世界情勢において、唯一孤立している国と言っても過言ではない。

彼らが魔王と呼称し、敵対する者——それは、この世界を創ったと言われる者。「創造者」という物々しい肩書きと共に、世界を管

理する存在である。

創造主が何処にいるのかを、ユギは教えてもらえなかった。彼がガンア国王から告げられたのは、ただ、勇者となって魔王を殺せという言葉のみ。

そうすれば、世界は滅びる。

「勇者が魔王を倒す、それは分かりますよ。在り来たりなお話ですから。でも、どうして師匠が」

「ガンアの人が言ってたけど」

ユギはアノから眼を逸らし、ごろんとベッドの上に寝転がった。

「どうにも、俺にはとんでもない力が備わってるらしくて。まあ実際それは本当の話で、城にいた時、ために二階の部屋から飛び降りてみたんだけど」

「馬鹿ですか」

「うるせえ」

茶化すな、とユギは静かにため息を吐く。

「飛び降りても、怪我一つしなかった。というか着地した地面が軽くひび割れてたよ。……まあ、そのくらいの身体能力を、手に入れちまったみたいだ」

「手に入れちまった」

「ああうん、それはこっちの話」

耳聡いアノの言葉に、ユギは曖昧に茶を濁した。それから取り繕うように「それよりも」と話を切り替える。

「結局のところ、俺はどうして勇者にされたのかは分からない。この身体能力だけが理由かもしれないけどね。まあどうであれ、止めるつもりはないぞ」

「それは——この世界を滅ぼすという意味ですか」

「うん。創造主を倒せば世界が滅びるっていう原理は、いまいちよく分からないけどね」

「確かに、変なお話ですね」

「創造主が実は機械とかなら、まだ分かるけど——まあ、それはと

もかく」

ごほん、とユギは寝転がったまま咳を吐いた。

「アノ、記憶の調子は、どうなんだ？」

その言葉の意味は、つまりそのまま、アノの記憶を指す。彼女は、ユギの弟子になる少し前から記憶喪失になってしまっていた。言語知識、教養の類は残っていたが、彼女が今までどのような生活しどのような人生を送ってきたか、その全ての記憶を失くしている。

それはこの長い旅においてはあまり関係の無いことだったが、流石に旅を終えるまでに記憶を取り戻してもらわないと、ユギにとつて困ることもいくつかある。

ユギの言葉に、アノは少し沈黙を挟んだ後、答えた。

「いえ。まだ、全然です」

「そうか」

ユギが考えていた通りの返答だった。そもそも、こんな何のきつかけも無さそうな所で記憶を取り戻そう物なら、肩透かしとは言えないけれど、ユギはおろかアノ自身も、複雑な心境になったに違いない。

やがて、ユギは大きく欠伸をし、布団の中にもぐりこんだ。アノがその様子を眺め、声をかけてくる。

「もう眠るんですか？」

「うん。流石の身体能力でも、数時間の使役には耐えられないようだ」

「意外と雑魚っちいんですね」

「今に見てろよ弟子風情が」

その言葉を最後に、ユギは深く暗い眠りの底に、意識を沈めていった。

残されたアノは、暫くユギの眠る姿を観察した後、彼の隣のベッドで眠りについた。

2（後書き）

リテネを中心とする草原の国の特産業は、草原焼き物と呼ばれる硝子細工。

緑色の装飾が美しく、その筋の商人の間では一時期とても流行していました。

しかし近年世界的に硝子材料の不足が危ぶまれ、急激に硝子の値段が跳ね上がりました。それに応じてリテネの産業も収縮し、今では草原焼き物を売る商人はごく僅かにしか残っていません。

煩い煩いと感じて眼を覚ますと、案の定蟬の鳴き声が原因だった。朝早くからご苦労様と寝惚けた頭で呟き、ユギはベッドから這うようにして脱出した。

先日アノが座っていた椅子に腰掛け、閉められた大きな窓の鍵を外す。窓を開くと、夏の朝の爽やかな空気が、密封されていた部屋の中に入り込んできた。

外の光が眼に痛い。まだ太陽は傾き気味に空に浮かんでいる。窓からリテネの景色を見渡しても、外を出歩いている人間はほとんどいなかった。頭が冴えてくるまでの時間、外の景色を十分に堪能した後、少し散歩してみようと思い、ユギは部屋の中に身体を戻した。アノはまだ眠っている――ように見えたが、なんだか布団の中でもぞもぞと蠢いている。彼女は寝相の悪いほうではない。不思議に思い声をかけると、ゆっくりと布団がめくられ、中からアノが顔を出した。その顔がなんだか悲痛さを漂わせる表情をしており、自然とユギは身体が強張るのを感じた。

慌てて、傍に寄る。

「どうかしたのか」

「足を吊りました」

ユギが散歩を終え部屋に戻ってくると、どうやら足も回復したらしいアノが、窓際の椅子に座り外の様子を眺めていた。時間を確認すると、午前九時を少し過ぎたところだった。

と、部屋に入ってきた人の気配に気付き、アノが顔を向けてきた。それがユギであることを確認し、彼女は身体を部屋の中に向け椅子に座りなおした。

「おかえりなさい、師匠」

「ただいま」

「賢者の石は見つかりましたか？」

「うん」

適当に冗談を返し、ユギは即座に話を切り替える。

「で、どうする？ もう出ても大丈夫か？」

「はい、私は大丈夫ですよ」

「そうか。それじゃあ、行こう」

ユギの言葉にアノは一つ頷き、椅子から立ち上がった。ユギもアノも、ズボンの右ポケットに入った財布以外、特にといって荷物は無い。早朝強引に出てきたままのベッドをなんとか元の状態に直してから、ユギはアノをつれ宿屋の一室を去った。

宿屋のフロントで会計を済ましてから、外に出ると、アノは宿屋の隣にあるお土産屋の中にいた。相変わらず自由行動が好きな少女である。好奇心がやたら旺盛な所だけは、年相応というべきか。かくいうユギも、その内にひめたる探究心の塊は、中々どうして大きな物なのだが。

「何を見てるんだ？」

「藁人形です」

「呼吸をするように嘘をつくんだなお前は」

何かに熱心に視線を注いでいるアノに近寄ってみると、彼女はとうやら小さな万華鏡に心を奪われているようだった。数十もある飾りつけのなされた筒を一つずつ手にとって、まさしく万華鏡よりしく眼をキラキラさせて、その筒の中身をのぞきこんでいる。まるで乙女のようなのである。常に何事にも冷淡な感想しか抱かないアノが、このように一つの物に深い興味を寄せるのは、中々珍しいことではあった。

「師匠、これ、ほしいです」

予想通り、アノは数分の吟味の末にそんな事を言ってきた。

ユギは暫く考えてから、ふっとため息を吐き、彼女が手に持っている黄色の装飾がされた筒を受け取り、お土産屋のレジへと持って

いった。

「いい買い物をしました。師匠、これはポイント高いですよ」

「なんのポイントだよ」

「尊敬ポイント」

「お前実は俺の事を師匠として見てないだろ」

「嫌ですねえ、冗談は顔だけにしてくださいよ」

「……それ、口で言うんないんじゃないか？」

リテネを出て数十分が経つ。まだ太陽も昇りきっておらず、これから暑くなる時間だろう。遙か遠くに森の入り口が見えるが、そこまで辿り着くには、まだ暫くの時間を要しそうだった。

辺りには相も変わらず何も無く、不恰好な街道がゆるやかに続くだけである。雲一つ無い青空を仰ぐと、黒いシルエットの鳥が一匹、優雅に大空を飛んでいた。

「それはそうと、師匠」

「どうかしたか」

「次は何処に向かうつもりなんですか？」

「いや決めてない」

「計画は計画的に、ですよ」

「お前にだけは言われたくないなあ」

前方に口を開く大きな森の中は、もうリテネとは違う国の領土だ。まだガンアから旅立って数日も経過していないが、これで早くも三つ目の国という事になる。創造主が何処にいるかは見当もつかなかったが、大凡世界の果てのような場所にいるに違いない。北に大空洞、南に時間の裂け目、である。

一先ず現在位置の確認が先決である。アノが常備している地図を貸してもらい、巻物を読むような要領で横に広げた。

隣から、アノが顔をのぞかせる。

「今歩いてる所が、リテネから《嵌りの森》に続く街道の中。で、

《嵌りの森》に入った直後から、ヒルレイの領土ね……この国はどうやらリテネと比べて大きいみたいだ。とりあえず、このリスポールとか言う街に行ってみようか」

「なんだかギターみたいな名前の街ですね」

「それはレスポールな」

地図を丸め、アノに返す。アノは基本自分の意見を示すという事をしないので、ユギの意見は毎回提案と同時にほぼ可決されたようなものである。例外もあるが、その反応の大抵がどうでもいい事柄に対してだった。

ユギは眼を伏せ、静かに想像する。

「アノ」

「はい」

「もし、俺が、本気で世界を滅ぼそうとしてるなら、お前はどうかしたい？」

「質問の意味が分かりません」

「俺が創造主を殺すことになっても、お前はそれを止めずに見てるのか」

その言葉に、アノは自身の柳眉を逆八の字の形に寄せ、うーんと唸り声を上げた。それから、彼女にしては珍しく控えめな口調で、返事の言葉を口にした。

「多分、師匠じゃ創造主さんは殺せないと思います」

「俺がか？」予想の斜め上をいく返答に、ユギは思わず吹き出した。「まあ、そりゃ自分がそこまで残忍な人間だとは思ってないけどさあ」

ユギは冗談を口にするように、穏やかな口調でそう言った。しかし、アノの表情は硬いまま変わらない。

「そういう事じゃないですよ。師匠が最後の最後で創造主さんを殺すのを躊躇うか躊躇わないかの問題の以前に、きつと、殺す段階まで追い詰めることは出来ないと思うんです」

「ふうん……確かに、創造主だけあるんだから、それなりの力は持

ってるんだろうね」

「精神的にも強いと思いますよ」

「精神的」

アノの言葉を反復する。それは、精神的な攻撃に耐えうる強さ、という意味ではない。

「創造主さんは、きっとなんらかの理由があつて、この世界を作ったんだと思います。だからそれと対を成すように、この世界を滅ぼす理由が無いと駄目なんです。プラスマイナスがゼロになるように」

「世界を滅ぼす理由かあ」

ガンアにそう命じられたから？

それは理由になっていなかった。

「まあ、そういう理由で、まだ師匠は創造主さんを殺せないんじゃないかなって。幸いまだ時間はありますし、この旅で一つでも多く何か理由になりえる物を得られたらいいですね」

「……まるでお前が俺の師匠のようだな」

「過ぎた言葉だとは分かっていますよ。でも、どうしても言っておきたかったんです」

アノはそう言ってから、一度立ち止まり、その場で頭を深く下げた。彼女なりの謝罪のつもりらしい。

確かに、今の言葉の数々は決して弟子が師匠に向けるような物では無かったが、師匠であるユギの考えを大きく揺さぶったのも事実だった。

彼自身、何も考えていない訳ではなかった。どうして自分が勇者に選ばれたのか、どうしてガンアは世界を滅ぼそうとしているのか。しかし、どんな理由があつたにしても、ユギは——自分の身体能力が異常に発達している事を知ってから——、自分は特に何の苦労も無く、創造主を殺すことが出来るだろうと考えていた。

今の彼に、理由と呼べるものは何も無い。ガンアからの命令も、ガンアが勝手に取り決めたことで、それは決してユギが自ら選択した道ではなかった。

この旅の中で、自分自身が決めた、世界を滅ぼす理由を探しだす――それが、アノがユギに言いたかった事である。

ユギは静かに息を吐き、頭を下げたままのアノに言葉をかける。

「お前の言いたい事は分かった。善処するよ」

「はい。私は、師匠がどう動こうが、師匠についていきますから」

「頼りにしてるよ」

「それは止めてください」

「嘘に決まってるだろ」

冗談を交わし、再び二人は肩を並べて歩き始める。彼らの旅は長い。辺りに木々が無くとも、耳に焼きついた蟬の音が、空から鳴り響いてくるようだった。

3（後書き）

短いですが、一章終わりです。次回からはもう少し長くなります。

ガンアは多くの魔物を従えています。この世界に野生の魔物はほとんど存在しません。それは魔物自体の生命力が著しく低い為です。常に誰かの手によって管理されない限り、一週間と立たずにその肉体は死滅してしまいます。

《化物狐》の章 1

人は人を化かす。だが実の所人を騙しているのは人の姿に化けた狐であり、人間たちは常に狐の悪知恵によって騙されているという事になる。

細い眼としなやかな体躯を持つ彼らは、一概に頭がよく回り、手先が器用で、何をやらせても卒なくこなす。感情的な面もあり、馬鹿にされたりすると必ず仕返しを行う。生命力が強い為どの地域の森の中にも必ず生息しており、狐を見かけたら容赦なく殺しても良いという末恐ろしい法律を施行している国も、少なからず存在する。中でも取り分け賢い頭脳を持つ狐は「原型種」と呼ばれ、各国のみならず、旅人たちの間でも注意すべき対象の一つであった。

地面に落ちた木の枝をぱきりと踏みしめ、ユギとアノは道を真っ直ぐに進む。辺りはリテネ周辺の草原とは打って変わり、自然が繁栄を謳歌し、その脅威の生命力を発揮する森林地帯となっていた。ユギの頭の遥か上にまで、大地の栄養を吸収した木々はその背を伸ばしている。青々とした無数の葉から今にも昆虫が降ってきそうで、ユギは内心戦々恐々としながら歩いていたのだが、事実彼らが太陽の光を避け、快適に歩けるのは、さながらドームのように空を覆う葉っぱたちのおかげだった。

国家ヒルレイの最東端、ラノマ地方と呼ばれるその地に鬱蒼と生い茂るのが、《嵌りの森》と呼ばれる広大な森である。その怪しげな名前通り多くの狐が生息しており、道行く人間たちを騙しては森の奥深くへと誘って行く危険な場所だった。そのまま帰らぬ人となった旅人も数多く、森の中央には立派な集落があるにもかかわらず、次第と《嵌りの森》は人々から敬遠される土地になっていった。

「そもそもこんな危険な森の中に集落があること自体おかしいよな」

「師匠の頭の中くらい危険ですよね」

「お前の頭の中は陰険だけだな」

いつものように殺伐とした応酬を交わしながら、二人は森の中を進んでいく。森に入って早数十分、もうそろそろ集落が見えてきてもおかしくない頃だ。

と、今まで普段どおり薄い微笑みを浮かべていたアノの相好が、唐突に気難しいものに变化した。どうかしたのかと思いユギが眼を向けると、アノは思いつめた表情でううんと唸り、

「狐って、もう少し可愛いものだと思ってたんですけどねえ」

と、話で聞いた狐に対しての感想を口にした。

「クリオネの食事シーンも中々えぐいもんだろ。それにアノ、知ってるか」

「なんですか」

「俺たちは食事するたび他の生物の命を食い散らかしてるんだぜ」

「人間は弱いくせに自分より強い生物を摂取しますからね。まさに弱食強肉といったところでしょいか。焼肉定食じゃありませんよ」

「お前は話題を三段跳びで蹴り飛ばすのが本当に上手だなあ」

嫌味っぽくゆっくりと言葉を発するユギを華麗に無視し、アノは歩調を少し速めた。

「それよりもさ」慌てたようにアノに追いついてきたユギが、先程より若干真剣味を帯びた声で言葉を発する。

「なんですか」

「本物の狐に会った時、如何にして対処するか考えておかないとだな」

「師匠が犠牲になればいいでしょう」

「てめえには遠慮というものが無いのか」

「空気が読めないんです。全身白衣で包まれていますから」

「……いやすまんよく分からなかった」

「口からヘドロ吐いてる場合じゃないですよ。ほら、あれ」

ぶつぶつと突っ込みを返しながら、ユギはアノが指差す方向へ眼

を向ける。二人の歩く道の少し先に、集落の入り口と思しき、小さな看板と大きな門があった。

ユギは反射的に眉を顰める。

「怪しいなあ」

「いかがわしいですね」

「お前の頭の中くらい奇怪だよな」

「師匠の頭の中は気持ち悪いですがね」

口々に訝しみながらも、そのまま二人は歩き続け、やがて門の目の前にまでやってきた。門の脇に建てられた看板には「用の者三度門を叩くべし」と古めかしいタイプの記述がなされており、ユギは暫く逡巡した後、結局アノに後押しされる形で、堅牢な木で作られた門を三回叩いた。

「怪しいんだか怪しくないんだかよく分からなくなってきました」

「その状況が一番怪しい」

忠告するようにそう呟いた直後、目の前の門がぎいぎいと壊れそうな音を立てながら、巨人が大口を開けるようにゆっくりと開いていく。その間から出てきた白い髭を見事に生え揃えたご老輩を見て、ユギはアノと同様に、怪しいんだか怪しくないんだかよく分からなくなってきたのであった。

《化物狐》の章 1（後書き）

第二章。読み方は「ばけものぎつね」。

ヒルレイは世界有数の、王城を領土に持つ国家です。リテネなどの大抵の国は住民たちが自由にやっていますが、ヒルレイのように領土の大きな国はそうも行きません。しかし現在のヒルレイ王は恐ろしい怠け者で、政治のほとんどを家臣に任せているのが現状のようです。

「残念、我々は実の所狐なんだ」

開口一番そう宣言された時は、流石に目の前の老人を殴ってしまったかと思った。間一髪アノがユギをいつもの毒舌で押さえた為、その場は事なきを得たが、ユギの硬く握り締められた両の拳は、それから数十秒の間解かれる事は無かった。

「我々は狐って、それは一体どういう意味だ」

ぶすりとした表情で、ユギは先を歩く老人の背中に言葉を投げつける。どこをどう見ても怒っていた。彼は比較的常識のある方だったが、少々怒りやすいのが瑕だった。そして、何故か初対面の相手だと口より先に手が出ることが多い。そんなユギを毎度の如く止めるのはアノの仕事であり、それは彼女の数少ない心労の一つでもあった。

老人は歩くスピードを変えずに、くるりと振り返って二人を仰ぐ。妙なところで器用である。

「そのままの意味だ。この集落にすむ人間は、全て人間に化けた狐。それ以前にこの集落自体が、狐が化けている姿に過ぎない」

「という事は、本来の集落は違う所にあるという事か？」

「いや。そもそも人間の集落なんてものは、この森の中に存在しないんだよ」

「なんだそりゃ……」

ユギは首をかしげ、興味深げな顔で辺りを見回す。既に両手の握り拳は解かれていた。アノは一度、眉を顰めたユギの顔を見つめた後、彼と同じように辺りに眼をやった。

集落を囲むようにして立っている巨大な木の壁を見る限り、集落はそう大きくないようだ。辺りには十数の民家が立ち並び、小さな子供たちが、無邪気な顔でボールを蹴って遊んでいた。これが狐の化けている姿だとは思えない程に、現実味の溢れた光景だった。

と、少しの間黙っていた老人が、集落を観察する二人の様子を見ながら、ゆっくりと呟いた。

「お前たちは、運が悪い。これから、狐たちのお祭りが始まるんだ」
「お祭りだって？」

ユギが老人に眼を向ける。老人は自らの白い髭を撫でまわし、神妙に頷いた。

「《嵌りの森》の全ての狐が集まって行われる、一年に一度の恒例行事だ。本当は秋の暮れ頃にやる予定だったんだけど——ついこの間外からある狐が帰ってきたから、そのお祝いという事で、時期を早めることになったんだ」

「具体的に、何をするんです？」

黙って話を聞いていたアノが尋ねる。老人は先程と同じように頷いた。

「聞いて驚くなよ——《嵌りの森》そのものに、化けるんだ」

「……それはまた」

短く言葉を返したアノの顔には、明らかな困惑の色が浮かんでいる。流石の彼女も、話の突飛さに驚きを隠せないようだ。それきり黙ってしまったアノに代わり、今度はユギが質問をした。

「森に化ける。成程、狐ならではなんだろうが、で、何をするんだ？」

「面倒くさい人間たちだな。そんな事が聞きたいのか」老人は不愉快さを隠そうともせず、露骨に顔をゆがめた。

「あんたがお前たちは運が悪いって言ったんだろ」ユギは顔色一つ変えずに答える。「話し始めたのはあんたなんだから、そのくらい説明してくれたっていいだろう」

意味も無く堂々としているユギを見て、老人は一つため息を吐いたかと思うと、再びくると振り返り、前を向いてしまった。しかし一応話はしてくれるようで、老人の小さな背中越しに、至極面倒そうな声が聞こえてきた。

「森に化けると言っても、実際化けるのは一匹だけで、後の狐は全

員その化けた森の中に入る。その中で、てんやわんやのお祭り騒ぎをするって訳さ」

「そんなのこの森でやればいいじゃないか」

「狐は自分たちが住む土地を汚すのをなによりも毛嫌うという事を知らないのか？ その点化けた森の中は所詮偽りの物でしかないからな、何をしたって許される」

「なんだかひねくれた発想だなあ」

「我々にとって褒め言葉だよ、それは」

「別に褒めたつもりは無いけどな」

ユギは息を吐く。人間にとって不可解すぎる内容の話だったが、大体の事情は把握できた。彼自身、そういった物に対する適応能力に優れているきらいがある。アノも、理解が出来ないと言った様子の顔をしていたが、彼女は彼女で自分の中で踏ん切りをつけようとしているようだ。

やがて老人とユギたちは、先程ユギとアノが入ってきた門の正反對、つまり集落の出口となる門の前まで歩いてきた。アノは目の前に聳え立つ門を見上げ、質問を口にする。

「あの、この門師匠の頭の形に似てますよね」

「そうそう、偶然にしては出来すぎた一致——っておい」

ユギ師匠、意味の無いノリ突っ込みだった。

そんな二人の漫才を全て無視し、老人はゆっくりと左手を上げ、門を指差す。ユギとアノの視線も自然とその指が指し示す方向に向く。

それから数秒遅れて、巨大な門が土埃を巻き上げながら開き始めた。門の先に、集落に入ってくる前と変わらない《嵌りの森》の肥沃な森林が見える。ユギは首をかしげ、黙ったままの老人に声をかけた。

「どういうつもりだ。帰してくれるのか？」

老人は表情を変えず、その細長い眼だけでユギの姿を捉えた。

「ああ、勿論。運が悪いというのは、君たちが祭りに参加しても面

白くないという意味だ。文化も趣も異なるだろうしな。さあ、早く行くがいい」

行け、と言われても、すぐに行動するのは難しい。何の気無しにアノに眼をやると、彼女もまたユギを見つめていた。あまり事態をよろしく思っていない様子である。早く出た方がいい、そのような事を言っているのだろう。

ユギは一つ頷き、改めて老人と向き合った。

「それじゃあ、お言葉に甘えて。俺たちは失礼するよ。邪魔してすまなかった」

「なに、気にするようなことでもない。気をつけてな」

「そちらこそ、お祭りを楽しんでくれ」

ユギはぎこちなく微笑み、老人と握手を交わす。乾燥した、小さな手だった。その、狐が人間に化けた物の感触を忘れないように念じながら、ユギはアノと共に、大きな門をくぐり集落の外へ出た。

少し歩くと、後方で門が閉じる音が聞こえてきた。振り返り見ると、閉じていく門の中に先程の老人が見えた。ユギはぶんぶんと手を振る。

「――そう言えば、二人とも」

不意に、老人はにたりと嫌らしい笑みを浮かべた。

「もし、今までの話が全て過去の話だったとしたら、どうする？」

え、とユギの振られていた手がぴたりと止まり、そして、集落の門が完全に閉まった。

2 (後書き)

狐は普段狐本来の姿であることはありません。その方が人間に狙われる可能性も低くなりますし、幼い狐にとっては化けの練習にもなるからです。彼らは一概に頭が良く回りますが、教養知識の面においては、個々で激しく差があります。

怪しい怪しいと考えて、実際考えていた通りだったとしても、まず的確に正しい行動を取る事が出来ないのが人間というものである。狐たちの集落を半ば追い出されるような形で後にした二人は、共に暗澹たる思いで森の中を歩いていった。ユギと比べてアノの顔色はそこまで酷くは無かったが、それでも、まずい事になったと言う感情がそのまま表に出たような表情をしている。事実、普段無頓着な彼女が苦汁を舐める思いをする程には、先の見通しがまるで見えていなかった。

門が閉まる直前、老人がしたり顔で呟いた言葉。全てが過去の話だったら。その意味はまるで分からなかったが、なんだか得体の知れない気味の悪さを感じる。底の知れない沼の中で、不安定な位置から抜け出せないように。足掻けば足掻くほど沈み込んでいく。

置かれている状況がどうであれ、今のユギとアノに出来ることは、ただ只管に前進することだけだった。

「なんか、まんまと罠にかかった感じだな」

「恋みたいなものですね」

「思いつきの単語のみで話そうとする奴と会話を成立させるのがどんなに難しいか、今分かった」

「またまたご冗談を」

「足引っ掛けていいか」

軽口を言い合い、二人は切り開かれた道を直進する。互いに表情は硬くとも、まだ漫才をやるだけの余裕は残っていた。この余裕が消えた時が、彼らにとって真なる意味でピンチである。

複雑に絡み合った木の幹に足を取られないよう注意を払いつつ、ユギは無言で考えを進める。罠にかかった事が何を意味するのか。狐たちはどのような行動に出てくるのか――。

「あ、師匠」

不意に声をかけられ、ユギはびっくりとしてアノに顔を向けた。顔を向けられたアノは、表情の硬いユギを見て露骨に嫌そうな顔をした。

「何びっくりしたような顔をしてるんです。ここはお化け屋敷じゃないんですよ」

「お化けの森ではある。いや、突然声をかけられたから驚いただけだよ」

ユギの弁解に、アノは短くふんと鼻を鳴らす。

「このシュールストレミングメンタルが」

「なんだそれは。俺が臭いって事かよ」

「師匠口臭いんですもの」

「冗談であってもその手の精神攻撃はタブーだ。いじめかっこ悪い」ユギは深くため息を吐き、やる気の灯らない眼を前方へ向ける。

遙か先に白い光が見えた。あそこが森の出口だろうか。一瞬だけ喜びかけたが、先程の狐の言葉を思い出し、その気持ちも一瞬で萎えてしまった。こういう場合、何処かしらに全回復のポイントがあって、それからボス戦が始まるのである。

「師匠、これは現実なんですよ」

「俺にとっちゃゲームと変わらない。まあ痛みは体感式だけど」

「その冗談はナンセンスです」

「黙ってろ、シュールストレミングメンタル二号機」

気温は高くなくとも、どこかじめじめした空気が辺りに漂っていた。ユギは額の汗をぬぐう。肺が重い。呼吸が鈍い。空を仰げば、木々の間に太陽が見えると言うのに、この閉塞感は何処から来るものなのか。思わず、舌打ちを漏らしてしまう。

「……大丈夫ですか、師匠」

先程からユギの様子を窺っていたアノが、僅かに声のトーンを落とし、そう言った。ユギは彼女に眼を向ける。アノもアノで、十全とは言い難い顔をしたが、その表情には僅かながらユギを心配する色があった。彼女の深い黒色の瞳をじっと見つめた後、ユギは顔を

再び前に向け、そして一つ頷いた。

「大丈夫だ。とっとこの森を抜けよう」

その瞬間だった。ユギの足元の地面が、底が抜けたように黒色へと変わった。遅れて、木々のざわめく音。木から木へ、葉から葉へ、その振動が伝わっていく。生命のもらす呼吸。その息吹。ユギは眼を見開き、その者の気配を感じ取った。

「――陸上式ジャンプッ！」

ユギは強引にアノの手を引っつかみ、前方へと跳躍した。

直後、爆発音。

数拍の浮遊感の後、衝撃が足の裏に響く。倒れないようにアノの身体を支え、ユギは、今まで自分がいた場所を仰ぎ見る。

道の真ん中に、もうもうと土煙があがっていた。周辺の木々や草花が、黄土色の霧の中にその姿を隠している。ユギはアノを支えていた手を下ろし、代わりに彼女を庇う様に横へ突き出した。絶えずその者の気配はそこにあったが、それが何であるかまでは把握が出来なかった。いや、状況を考えれば狐としか思えないが。

「なんですか、お祭りですか」

「こんな時によくそんな事言う余裕あるなお前」

横からひよいと顔を出したアノが、首をかしげてユギの顔を見上げる。そして一つため息を吐き、また何か下らない事を言おうとした所で――

「天に百舌。地に百足」

土煙の中から、若い女の声が聞こえてきた。ユギは身を強張らせる。アノは相変わらず無表情だ。

女の声が続く。

「東に灯台。西に闇」

「……何言ってるんだ？」ユギは眉を上げた。

「前口上じゃないですか？」アノは眉を顰めた。

「朝日と共に姿を崩し夕日と共に姿を溶かす」

「ああ、狐か」ユギは眼を落とした。

「おお、ヒーローですね」アノは眼を細めた。

「彼は言う、人に言う。彼女は叫ぶ、誰かを叫ぶ」

「熱が入ってるな」ユギはやれやれと頭を左右に振った。

「格好いいですね」アノはうんうんと頭を上下に振った。

「聞け、旅人、その名をしかと記憶しろ。我が名はセキコ——構築と分解を繰り返す、万物の王である！」

そして、辺りを覆っていた土煙が消え、そこに居る存在の姿があらわになった。

燃えるような赤色の髪。東洋の忍が着るような黒装束。その裾から、肌色の足が伸びている。靴は履いていない。素足のまま、硬い地面を踏みしめている。整った顔立ちは少女特有の柔らかさを持っていたが、今の彼女の表情は、まるで獲物を捕らえようとする獣のように、鋭く尖っていた。そしてその赤い髪の上に、ベージュ色の耳が二つ、己が人外の生物であることを証明するように、天に向かって直立していた。

狐だ、とユギは確信した。それもとびきり凶悪な種類である。「原型種」という単語が、脳裏にくっきりと浮かび上がる。

狐はふつとその険しい表情を緩め、笑顔になった。口角がニヤリと吊りあがる。細まった眼は、ユギとアノをじっと見つめている。

「おいおい。もう少し反応をくれたっていいんじゃないですかね、旅人諸君」

不意に、狐が口を開いた。挑発的な声色だった。装束に覆われた両腕を左右に開き、仕方が無いと言いたげに肩をすくめている。

ユギは一步前に出て、赤髪の狐に言葉を投げつけた。

「あんたは何者だ？ 見た感じ、狐にしか見えない訳だが」

「狐エ？ はん、よく分かってるじゃないか。名前はさっき言ったとおりさ——セキコ。てめえら二人とも貧相な顔をしてるが、一度くらいは聞いたことあるだろ？」

「セキコ？」

アノが狐の名を反復する。前に出ようとしたが、ユギの手がそれ

を抑えた。一瞬だけむつとした顔でユギを睨んだが、すぐに再びセキコと名乗った狐に眼を向けた。ユギが口を開く。

「いや、聞いたこと無いな。あんた、そんなに有名なのか？」

「知らないだあ？」セキコは大きく眼を見開いた。

「お前さんお前さん、冗談は良くないな。出来立てのケーキが狸の形をしてるくらい良くない」

「それはきつとケーキじゃない」

「ケーキじゃなかったらなんだっていうんだよ！」

「なんで怒るんだよ」

「てんめえ分かってねえなあ、今時のケーキは全て狸の形で出来るだろうが！　そんなん知らないで私と友達になろうってのか？」

セキコはきりと眉を吊り上げ、何故か憤慨する。ユギはため息を吐き、頭を抱えた。またこういう訳の分からないキャラクターが登場してしまうのか。今の自分にはアノの対処をするだけで精一杯だというのに。

苦悶の表情でうずくまったユギを横目にいれながら、アノはセキコと向かい合った。

「……こんな人ですが、私の師匠です。以後お見知りおきを」

「師匠？　この薄汚いスパゲッティ野郎がか」

セキコは顎でユギをしゃくった。アノは相槌を打つ。

「そうですよ。いや別に尊敬はしていませんけど」

「しろよ」

ゾンビのようなうめき声を発し、ユギがゆっくりと立ち上がった。その表情は虚ろだ。何度か瞬きを繰り返し、自らの髪をくしゃくしゃにかき回すと、ようやくその瞳に光が宿った。

セキコは腕を組み、ニヤリと邪悪な笑みを浮かべた。

「ふん。おもしれえ。お前ら二人とも名乗りをあげな」

「名前？　……ユギだ」

「後藤です」

「ほう、ユギと後藤——いやちょっと待て、てめえそれ偽名だろ。」

ユギってなんだそりゃ」

「俺かよ」

「師匠、つまらない冗談はやめてくださいよ」

「お前がだ！ 何ちゃっかり話あわせてんだよ！」

荒々しくアノに突っ込みを入れた後、セキコを見る。

「こいつの名前はアノだ。で……セキコとやら、あんたの目的は何だ？ さっきの爆撃、下手したら俺ら死んでたぞ」

「たまには刺激になるかなって」

「近所のお姉さんっぽいこと言ってんじやねえ」

「お師匠さんはつれねえなあ。もう少しゆとりを持てよ。なあ、弟子」

こくこくとアノは頷いている。何も見ていないことにした。

「結局の所、お前にはなんの目的も無いんだな？ 俺たちは早く、この薄気味悪い森の中から抜け出したいんだが」

「――薄気味悪い、だ？」

ぴくり、とセキコの額に青筋が浮かんた。黒装束に包まれた全身が、小刻みにわなないている。まるで憤怒に身を高ぶらせているようだ。突然なんなんだと、ユギは警戒に身を固めた。

不意に、風が吹いた。葉のこすれあう音がする。服が身体に張り付き、ごうごうと吹く風に弄ばれている。セキコの艶やかな紅蓮の髪が、燃え上がる炎のように、宙に広がった。

「村長の話は聞かなかったのか、ユギ」

細長の瞳がユギを捉える。

「狐はよお、自分の住む森を汚すことを何より嫌うんだ――それが、誰の行為であったとしても」

吹き荒ぶ風の中、地面が振動を開始したのはその時であった。唐突に訪れた衝撃に、思わずユギとアノは地面に手をついた。腕を組み、見下すように二人を見据えているセキコのみが、揺れ動く地面の上で仁王立ちをしていた。

「な、なんですかこれ。アトラクションですか」

「随分手の込んだやり方だなおい」

地面が隆起する。轟音と共に、三人がいる大地が上へ上へと上がっていく。木々が姿を変え、解けていく。花の香りも、吹いていた風も全て消え、やがて振動が停止した。

ユギはおぼつかない足取りで立ち上がった。ここは何処だろうか。なんだか騒々しいのは何故だ。ぐるりと、辺りを見回して――彼は絶句した。

大量の人間が、ユギたちを取り囲むようにして騒いでいた。彼らがいるのはユギたちが居る場所から少し上で、手元の柵から身を乗り出すようにして野次を飛ばしていた。柵の下には壁があり、此処から登っていくことは難しい。どうやら自分たちは、コロシアムのような物の中に入れられているようだ。

人間――否、狐たちは、一同にセキコの名を叫んでいた。その熱狂ぶりたるや、一国の王の姿を前にしているかのようなのである。ユギは肩をすくめ、前方に立ち構えるセキコと向き合った。

「どういうつもりだ、セキコ」

「見て分かれ。私とてめえらは、祭りの出し物なのさ」

村の老人の言葉が蘇る。全てが過去のことだったなら。

つまり、もう既に祭りは始まっている――？

「賑やかですねえ。まさにお祭りって雰囲気です」

「こういうのは外野から眺めてたかったんだがなあ」

「でもここは野外ですよ」

「そういう意味じゃねえよ」

アノに突っ込みをいれ、ユギはため息を吐く。それは懨然のため息であり、安堵のため息でもあった。

大丈夫、まだなんともない。俺らにとって、この程度、ピンチでもなんでもないのだ。

そう思わなければ、こんな状況、やっていられない。

セキコが腕をあげた。同時に、観客たちがどっと沸きあがる。

「――構えろ、ユギ。まずはお前から化かしてやんよ。お師匠様の

次は、弟子だ」

「おいおい、RPGは基本弱い奴から倒さないといけないんだぜ。それでいいのか？」

「師匠、余計なこと言わないでください」

「分かった分かった足を踏むな。いいからお前は下がってろ」

アノは先程のように、一度だけユギを睨みつけたが――すぐに、後方の壁際へと走っていった。

そうして、コロシアムの中央にはユギとセキコのみが残った。互いに睨み合い、全身からはえもいわれぬ気迫を滾らせていた。額から垂れた汗を拭い取り、不意にユギが笑う。

「セキコ。本気でやってもいいのか？」

「たりめーだ胡麻野郎。別に手をぬいてもいいがな、その瞬間お前はプラグアウトするぜ」

「ここは電脳世界なのかよ」

ぶん、と大気を震わせ、セキコは右腕を振り回す。水分が飛び散る様のように、段々とその黒色の形は姿を変え、やがて再び形を確かなものにする。セキコの腕、肩から下の部分に出来上がったそれは、歪な形状を模した剣のようだった。

ははは、と乾いた笑い声が口から漏れる。あれが姿を化かす能力。どうやら自分自身が変化するだけでなく、一部分だけを何かに変える事も出来るようだった。

「勿論こんな事出来るのは狐の中でも極少数さ。原型種って呼ばれる奴らのパフォーマンスだなア」

「器用なもんだな。地味すぎるが」

「褒めるなよ照れるぜ。うっせえよ人間風情が」

まるで叩き合うように、二人は会話を交わし――そして、二人同時に、動き出した。

3 (後書き)

長いです。章末までずっとこんな感じ。

狐が化けられる物の範囲は化ける狐の知識量によって決定する為、当然より多くの知識を持っている方が多くの種類の物に化けることが出来ます。しかし、現代の狐の祖先に当たる存在は、自ら化ける事により新たな物体を生み出したことから、必ずしも知識が全てだとは言いきれません。彼のように化けることで新しい物を生み出そうと躍起になっている狐も大勢いますが、今の所そのすべてが失敗に終わっています。

声にならない怒号のような歓声が、耳を劈く勢いで辺りに響き渡っている。アノはコロシアムの隅にしゃがみこみ、激突したユギとセキコの戦いを眺めていた。

リテネの宿屋で言っていた通り――ユギの動きは、常人のなせる物とはあまりにもかけ離れていた。鳥のように舞い、虎のように攻撃を加える。攻撃の一つ一つが、敵対するセキコの身体を着実に傷つけている。その上、セキコの鋭い剣戟を全て躲し切っているのだ。彼女の焦りにも似た緊迫の気迫が、遠く離れたアノにも感じ取ることが出来た。

ここから、ユギの表情を見ることは出来ない。彼は今、何を考え、何のために戦っているのだろう。

「あの少年……何者なんだ？」

不意に声をかけられる。声がした方向へ眼を向けると、先程狐の村の中で話をした老人が、驚愕の表情を浮かべて隣に立っていた。

アノは短く言葉を返す。

「私の師匠です」

「師匠？ ああ、そうか、お前は村でそう呼んでいたな……」

老人の言葉にはどこか覇気が無い。彼の関心は元々、ユギとセキコの戦いに向けられているのだろう。何故話しかけたのかとアノは疑問に思ったが、別に老人はアノに話しかけたつもりはなかったのである。

と、突然観客の歓声に動揺が混じった。中央の二人に眼をやると、セキコが右肩を手で押さえ、地面に座り込んでいた。彼女は口から炎が出そうな勢いで、ユギに向かって何事かを叫んでいる。元気そうだ。周囲の観客がざわついているせいで、彼女が何を言っているのか分からない。

おそらくは特撮のヒーローが言うような、視聴者を大いに盛り上

げる言葉なのだろう。近いうちに変身をしてくれるに違いない。そうなったなら格好いいなと、アノは楽しげに頷き、二人の戦いを見守る表情で眺め続ける。

「――てめえ、今の反則だろ！ ルールブックに載ってねえぞそんな攻撃！」

「ルールブックってなんだよ」

「金枝篇！」

「読んでる訳ねえだろ！」

コロシアムの中央は火口の中にいるような熱気に包まれていた。セキコは血の滲んだ右肩を押さえ、忌々しげにユギを睨んでいる。今にも飛びかかるとする表情だったが、彼女の負った怪我がそれを許さなかった。ペツ、と唾を吐き、セキコは肩を押さえたままゆらりと立ち上がる。

「ったくよー。てめえなんなんだよ、外来生物かよ。そこまでルールを無視して勝とうたア、流石アウェイじゃやることが違うな」

「何がルールだ何が。勝手に反則扱いすんな」

「世迷い言をほざいてんじゃねえこの醬油野郎が！」

訳の分からない事を口走ったかと思うと、セキコは剣を突き出し、勢いよくユギに突進した。黒い剣の先端が首を掠める。顔を歪めたユギは、ばねの様な跳躍で後ろに飛び、セキコと距離をとった。

首の傷が痛む。不意を突かれた攻撃に、僅かに反応が遅れてしまった。しかし、不意打ちとは、果たしてルール違反はどっちなんだと問いただしたい。

「はっはー、斬られてやんの。ばーかばーか」

「餓鬼かお前は」

「御年16だ。ふん、ピッチピチの少女ってな」

「若いなおい。だが少女ではない」

「私が少女だったなら全世界の生物全てが少女なんだよ！」

「もうお前が世界滅ぼしてこいよ……」

一人で盛り上がるセキコを睨み、ユギは嘆息する。

「とーもかくだ。私は疲れた。そろそろ決着をつけるぞ、味噌漬
野郎」

「お前、よく喋る奴だな」

「てめえこそ、ひらひらしてて気持ち悪いっただらありやしないぞ」

「ひらひら？」

「そこは蝶かよって突っ込めよ」

「……。無理言うなよ」

「おいおい、おーいおいおい、突っ込み役が沈黙するの禁止！ 下手したらてめえが消える！」

分かった分かった、と手を出し、セキコの言語攻撃を止めさせた。セキコはむっとした表情で、右腕の剣を構えなおす。ユギは肩を回し、呼吸を整えた。

「――行くぜ、オイ！」

「そのネタはやめろ」

ユギの突っ込みと同時に――セキコが一步、前へ踏み出した。

「あーあ。結局変身は無しですか」

「あのセキコを圧倒するとは……本当に何者なんだ？」

「だから私の師匠だって言っているでしょうが」

コロシウムには、先程と同じ動揺が続けて広がっていた。

誰もが、今日の前に広がる光景が信じられないようだった。それは確かに、彼らにとって考えられない結末であったが――アノにとつては、半ば予想済みの光景だった。

コロシアムの地面の上に、セキコが仰向けで倒れていた。その傍らに、ユギが気だるげに立っている。彼はほぼ無傷であるのに対し、倒れたセキコの身体には、ユギの拳がつけた無数の傷が残っていた。

「……そろそろいいですかね」

既に決着は付いているようだった。もう近付いても構わないだろう。

アノが立ち上がると、隣にいた老人が眼を向けてきた。半開きになった口が、言葉を告げようと上下に動く。しかし、口はぱくぱくと言葉にならない動きをするだけで、まだ驚きから回復していない事をアノに伝えるだけだった。

「言いたい事は分かります。でもまあ、仕方ないですよ」

アノはため息を吐き、老人にひらひらと手を振った。軽快に、中央に居るユギの元へ歩いていく。

「師匠、終わりましたか」

声をかけると、ユギはこちらに眼を向け、気だるげな表情のまま頷いた。地面に倒れたセキコが、相変わらず意味不明の言葉を発している。

「ちつくしよ、おかしいだろおかしいだろ。今の完璧に人外の動きだったぞ。私が言うんだから間違いない」

「元氣そうですね」

「あん？ ああ、弟子の方か。当たり前だろー、こんなやられたうちに入らないんだって。この食塩野郎が私を一回殴る間に、私はこいつを五十回は殴れるんだぜ」

「師匠、存外雑魚いんですね」

「お前らはもう少し現実を見た方がいい」

セキコはぐあー、と悔しげな呻き声をあげ、やがて沈黙した。どうやら眠ってしまったらしい。付けられた傷を見た限り死んでもおかしくない範疇だったが、この狐に限って死んだとは考えられなかった。

「……師匠、楽勝でしたね」

黙れば意外と端正なセキコの寝顔を眺めながら、アノはユギに声をかける。ユギは「どうだか」、と呟き、ふるふると首を振った。

「こいつも十分強かったよ。俺は俺で力みすぎてたし」

「そうなんですか？ 遠くから見てもうたけど、首に一回貫った時

以外、余裕そうでしたよ」

アノの言葉に、ユギは返事をしなかった。地面を見つめ、何故か肩をすくめる動作をした。

「あんまり心配してないんだな」

「はい？」

「いや。こいつと戦う時、心配してくれてるかなあって思ってたんだけど」

「ああ、まあ……」

アノは言葉を濁す。苦笑いを浮かべ、こちらを見るユギに眼を向けた。

「そりゃ、少しは心配しましたよ。師匠が戦ってる所なんて一度も見たことありませんしね。でも、なんか、直感で」

「それは有難い」

「まあ負けてもどうにかなるんじゃないかなーって」

「さいですか……」

ふう、とユギは息を吐いた。何か考え事をしているようだった。

アノは、彼にかける言葉を見つけることは出来ない。沈黙の中、アノは辺りを見回した。

観客は大分落ち着きを取り戻していた。先程のような動揺と興奮の色は見られない。誰もが会場の席につき、これからの動きを傍観している。しかし、その何を考えているか分からない冷静さが、アノには不気味に感じられた。

「アノ。俺は――」

ユギが口を開いた瞬間だった。

ばかり、と一際大きな音を立て、コロシアムの柵の一部が崩れ去った。幾重にも重なった観客の衝撃に、柵が耐えられなくなったのだ。ユギとアノは眼を見開き、壊れた柵に顔を向けた。

観客が躊躇いを見せたのは一瞬だった。柵が崩れ、コロシアムの中央への道が開けた数秒後――、彼らは、一同にコロシアムの中へと入り込んだ。

「ちょ、わ。どこのフリーガンですかあいつら」

アノが眼を細め、怒濤の勢いで走る観客たちを眺めている。彼らの目的は、勿論、セキコをいともたやすく打ち破った、ユギだろう。ユギは舌打ちを漏らし、能天気にもその場に立ったままのアノを抱きかかえ、コロシアムの出口へと疾走した。

柵が壊れたのが一部分だったのに救われた。コロシアムの中には夥しい数の狐がいたが、その少しずつしかユギたちを追う事は出来ない。コロシアムの両側にある、出入り口の扉を蹴破り、ユギは走り続ける。コロシアムの外は長い連絡口になっており、此処が巨大な建物の内部なのだと思い知った。

「師匠、何処へ!？」

「森の外に決まってるだろ!」

「そんな事言っただって――!」

抱きかかえられた状態のアノの言葉が、息が詰まったように途切れる。彼女の眼は、ユギの後方、依然として追いかけてくる狐たちに向けられていた。彼らの走る震動で、通路の床も大きく揺れている。

「め、滅茶苦茶ピンチです。サレンダーした方がいいですよこれ」

「そんな事はさせんだあ!」

聞き覚えのある声がすぐ後ろから聞こえてきた。アノが眼を向けると、先程眠ったはずのセキコが、それも無傷の状態でそこにいた。赤色の髪を大きく揺らし、愉しげに顔を緩ませている。

流石のアノも、言葉に詰まった。

「おい、弟子! それからユギ! うちの連中は血の気が濃くてねえ、こういう状況になるとすぐ騒ぎ出すんだよ。申し訳ないが、まあ折角のお祭りなんだ。勘弁してくれよ」

「……それはともかく、セキコさん」

「あん? なんだまっしろしろすけ」

「さっきの傷はどうしたんです?」

「いや私賢者の石持ってるから」

「……そうですか」

アノは眼を閉じ、ため息を吐いた。

「セキコ！ この森からはどうすれば脱出できるんだ！」

通路の角を曲がり、再び長い廊下に出る。未だ建物の出口らしき場所には辿り着けずにいた。ユギは顔を歪め、後方のセキコに向かって叫ぶ。答えはすぐに返ってきた。

「どうするも何も、森の外に向かってりゃ出れるだろ。それを森が許すかどうかは分からんけどなー」

「どういう意味だ？」

「言ったはずだぜ、既に祭りは始まってんだ。私たちが居るこの場所、狐が化けた森の中なんだよ」

「ふうむ。それなら内部から攻撃すれば、勢いで吐き出したりしてくれませんか？ 一寸法師みたいに」

「おいおいまっしろしろすけ、これは御伽噺じゃないんだぜ」

「でも化け物の話ではありますよね」

「誰が馬鹿者だってエ？」

「そんな事言ってますん」

「余裕あるなあお前ら」

再び、角を曲がる。しかし、目の前に広がった通路は、今までの景色とは違っていた。道の先が開けている。ユギは堅い床を強く踏みしめ、アノを抱える手に力を込めた。

「ん。出口のようだな。連中はまだ大分ついてきてるぜ。体力はまだ残ってるか、まっしろしろすけ」

「俺の心配をしろよ」

「師匠何バテてるんですか情けないですね」

「だからお前もだよ！ 話をあわせんじゃねえ！」

通路を抜けるとホールらしき場所に出た。右の方に、建物の出入り口と思しき扉がある。ユギはそれを確認すると、足を止めることなく、半開きになったその扉へと向かっていく。そして、迫りくる狐たちの怒号を背に――彼らは建物を脱出した。

4（後書き）

劇中セキコが口にしていた賢者の石。勿論彼女はそれを保有していませんが、一応伝説上の存在として、その宝石は実在すると謂われています。古今東西全ての病をたちまち完治させ、夢を願う者には全てをもたらす禁忌の秘宝。見た目はそこらへんに転がっている小石と大して変わらないようです。

ちなみにセキコの傷が無くなっていたのは、狐自体怪我の再生がべらぼうに早い為です。ユギとアノが会話しているうちに、セキコの傷はどんどん回復していたと言う訳です。つくづく無理をする生物ですね。

再び足を踏み入れる事になった狐が化けた《嵌りの森》は、まるで本物の嵌りの森をそのまま再現しているかのよう、精密に出来上がっていた。今、余裕を持ってこの自然を味わうことが出来ないのが残念である。後方からは絶えず狐たちの罵声が轟き、地面には震動が伝わってくる。

さて、とユギに抱きかかえられたままのアノが声を発した。前方を見つめ走り続けるユギの顔を見上げ、彼女は落ち着いた声で言う。「一先ず、コロッセオからの脱出は成功しました。次は《嵌りの森》そのものからの脱出な訳ですが」

「森に化けてる奴に、干渉が出来ればベストなんだがなあ。私が行けば一発でOK貰えるのに」

「今更なんだが、なんでお前は着いてきてるんだ？」

「後ろの奴らに言ってるのか」

「もうそれでいいよ」

「冗談だよ冗談。いじけんなって。さりげなく足をひっかけようとするな」ははん、とセキコは得意げに鼻で笑う。「まああれだ。ここまで強い奴を見つけたのは久しぶりだからな。狐魂が燃えるというか」

「狐魂ねえ」

「燃えたらうどんになるんじゃないんですか？」

「どっからその発想がくるんだよ……」

珍しくセキコがアノに突っ込みをいれた。ふっ、と気を取り直すかのように素早く息を吐き、走る速度をあげてユギに並ぶ。

「とーりーあーえーず、このまま走り続けても、おそらく埒があかねえ。どうにかすっぞ」

「具体的には？」

「ダイレクトアタック……いや……ううむ」

「だから、具体的な作戦をだねえ」

にやけ顔のセキコに問われ、人差し指を顎にあて考え込むアノ。答えを出したのは、僅か数秒後の事だった。

「セキコさん、今化けるくらいの気力はありますか？」

「あ？　ったりめーだろ、誰が何と言おうと私は最強セキコちゃんだぜ。今なら分身だって出来んぜ」

「それは好都合です。では――」

そしてアノは、真面目くさった顔で、信じられないことを言うてのけた。

前方を逃げるユギたちが、突然方向転換し、森の中へと突っ込んだ。

突進する狐たちの先頭は当然戸惑い、足を止めようとした。しかし情報が後方に伝わるのはそう容易な事ではなく、場は一時的なパニックに陥った。そのパニックも覚めやらぬ内に、狐たちはユギたちが逃げ込んだという森の中へ駆け込んだ。

しっかりと道が開けていない森の中を、大勢の狐たちが、我先にと走っていく。途中何匹もの狐が転びリタイアした。それでも皆顔に興奮を滲ませて、ユギたちを――自分たちの祭りの出し物を――追っている。

やがて彼らは、森の中に切り開かれた広場のような場所に出た。頭上に太陽の光を遮る葉は無く、広場の中央の地面は明るく照らされていた。そして、その場所に、大きな看板が一つ、意味ありげに立てられていた。

なんだこれ、と先頭の狐が看板に眼を走らせた瞬間。

その表情が、猛烈な憤怒に変化した。

うおおおおお、と獣のような叫び声をあげ、その狐は森の中へ走り去っていく。訝しげに彼の背中を見送った狐たちは、皆同じように看板に眼をむけ――そして、咆哮と共に走り出した。

——看板に書かれた言葉。それは、《嵌りの森》に対するありつたけの侮辱の言葉だった。

そうして、次々と狐たちは怒りに駆られて森の中へと消えていく。いつの間にか看板の数は増えていき——やがて、森全体に陰湿な言葉が書かれた看板が広がった。あちらこちらから狐たちの悲鳴と怒号が上がり、狐の化けた森は、一気に混沌へと迷い込んだ。

ユギとアノは、広場に生えた木の上から、狐たちの様子を観察していた。もう広場に狐たちはいない。とはいえ、まだ森に変化は無い。いくら彼らを欺けたとしても、森から脱出できなければ意味は無いのだ。

「しかし……効果てきめんだな、これは」

「でしょう？ 狐を化かすには狐しかいませんから」

アノは得意げに顔を緩めた。ユギは一つ頷き、辺りの様子を確認する。

「……まあ、これで追ってくる奴らはほとんど撒けたけど、肝心の森は——っと」

不意に、足元の木が揺れる。それだけではなく、目の前の風景が全て歪み、崩れて見えた。やがて景色は再び形を取り戻し、元通りになったが——。

「なんだ、今のは」

「なんだか夢から覚めた気分です」

「おーい、てめえら、降りて来いよー」

木の下から声がしたと思うと、猿のような動きを見せてセキコが上ってきた。広場の中央に眼をやる。先程まで狐たちを混乱させていた看板が、跡形も無く消えていた。

あの看板は、全てセキコが化けていた物だったのだ。

「《嵌りの森》の化けが解けたぜ。今なら森から抜け出せる」

「ん……でも景色は変わってないぞ？」

ユギが疑問を口にする、セキコの長い眉が綺麗に逆さ八字を描いた。

「馬鹿かお前。森に化けてた奴は、本来の森に覆い被さるように化けてたんだよ。ふん、偽物の森でも、森その物が侮辱されるのは許せなかったんだろうねえ、ひはは」

「それにしても、よく協力してくれましたね」

うん？ とセキコは首をかしげた。アノが微笑む。

「セキコさんだって《嵌りの森》に住んでいるんでしょう？ だったら、この提案をした時、怒るのが普通じゃないですか」

「あー、まあ、そうだな。愛情が無い訳じゃねえんだが……そんな記憶が無いんだよなあ」

「え……何故です？」 記憶、という言葉にアノは反応する。

「村長が、今日の祭りは帰ってきたばかりの狐を祝うためとか何とか言ってなかったか？ その狐ってのが、私のことなんだよ」

「ふむ……じゃあ、何故師匠が薄汚いって言った時、怒ったんです」「ありゃあ演技だ」 けろりとしてセキコは答える。

「ああやって主人公が怒ってる雰囲気を出しないと、会場が盛り上がるねえだろ」

「で、俺に負けた訳だ」

「負けてねえよてめえの反則負けだ」

セキコは後ろ向きのまま宙に飛び、空中で二回回転して地面に着地した。なんともなさそうにこちらを見上げる顔には、邪悪めいた笑みが浮かんでいた。

「帰ってきたってのは、今までお前何処に行っていたんだ？」

アノを抱えたまま木の上から飛び降り、ユギはセキコの前に着地した。アノが腕の中から降り、ありがとうございますと礼を言う。

セキコは眼を閉じ、んー、と思い悩むように呻いた。苦しげに眉が寄っている。ユギが声をかけようとすると、再びその眼が開かれた。

「言うべきなのかどうかは微妙な所だが……まあいいだろう。話してやる」

「何分くらい使います？」

「五時間くらい」

「……とりあえず歩きながら聞くよ」

「おいてめえ、今私が何言ってもその言葉を言っただろ！ ええ！
？ 少しは語るこっちの身になってみやがれこのソース野郎が！」

「アノ、行くぞ」

騒ぎ出したセキコを無視し、ユギは森の出口を目指して歩き始めた。待て、待て待てと後からセキコが追いついてくる。

「てめえら薄情だなあ。子供じゃないんだから五時間くらい我慢しろよ」

「自分を少女とか言ってた奴がよく言うよ」

「少女！？ てめえ今私を少女と表現したか！？」

びくり、と擬音がつきそうな程に、セキコが勢いよく後ずさった。
「呆れた……成程、てめえはそういう眼で私を見てた訳か。かー、
これだから男子ってのはいただけねえ。いただけないよなあ、まっ
しろしろすけ」

「ええ、全くです。屑みたいな思考ですね」

「此処で人生の引導を渡してやろうか、セキコ」

「上っ等だこのケチャップ野郎。代わりに私がお前にインド王を渡
してやんよ」

「インド王？」

「突っ込んだじゃいけない」

「はあ、とユギはため息を吐く。それから、隣を歩くセキコに眼を
向ける。」

「で、何処に行っていたんだ？ 簡潔に頼む」

「ふん。エルトアの庭で働いてた」

「エルトアの庭？」アノが鸚鵡返しに尋ねた。

「あー、なんだよてめえら。そんな事も知らないのか？ まあ、そ
りゃ私の名前を知らなきゃエルトアの庭も知らねえよな」

「……そんな有名なのか、お前の名前も、エルトアの庭ってのも」
「ついさっきも同じような事を尋ねたような気がしながら、ユギは

言う。返事は早かった。

「そりゃ、世界の創造源だからな」

「……は？」

まさに、寝耳に水。

ユギはぽかんと口を開け、セキコを仰いだ。あまりにも唐突だった。アノも眉を上げ、不思議そうな表情をしている。

同じような顔をする二人を交互に見、セキコは満足げに笑みを浮かべた。

「まあ驚くわな。荒唐無稽にも程がある——私だって、森にエルトアの庭の使者が話をしにきた時は、全身化かして森の奥に送ってやったぜ」

「……結局、話は本当だった訳か」

セキコは片目を閉じる。何かを思い出しているようだった。

「そうだな。あの雰囲気は本気でやばい。狂ってるというか、終わってるというか」

「そうか……」

静かに、セキコの話に反芻する。

まさかこんな所で、旅の最終目的地の事を知れるとは思わなかった。エルトアの庭。当然、聞いたことの無い単語だ。

「ま、そこで働いてて、色々あってな……結局この森に戻ってきて、ためえらと会った訳だ。聞きたいこともあるだろうが——はん、それはともかく、ようやく外が見えてきたぜ」

歩き初めて、数分が経っていた。辺りの風景に変化は無く、鬱蒼と生い茂る自然が、歩く三人を取り囲んでいる。しかし、彼らの向かう前方に、大きな光の束が見えていた。ふあ、とセキコが暢気に欠伸を漏らす。

「一日ぶりだなあ、外を見るのも」

「そんな実感あるものなんですかね」

「私は感受性豊かなもんでね……私みたいなのが、世界を動かしていくんだよな。間違いない」

「……で、お前はどこまで着いてくるんだよ」

「おいおい、そんな私のことが気になんのか？　初だねえ」

「お前帰れよ」

口々に冗談を言い合い、彼らは進んでいく。森の出口は、すぐそこにまで来ていた。

その時だった。

「――セキコ」

突然、小さな老人が森の中から姿を現し、彼らの前方に立ち塞がった。ユギは咄嗟に身構えたが、脇にいる二人は自然体のままだ。よく見ると、目の前に居る老人の顔には、見覚えがあった。

んお、とセキコが驚きの声をあげる。

「村長。どうしたんだ、こんな所で」

そこに居たのは、ユギとアノが狐たちの村で話をした、あの老人だった。セキコが一步前に出て、眼を細めて言葉を紡ぐ。

「まさかお出迎えか？　ありがたいねえ。こいつらは頼りない奴らだが、面白い奴らだぜ――」

「セキコ」

「ん……、なんだよ」

老人の声の調子は変わらない。ただ一点を――僅かに動揺したセキコの顔を――見つめ、口を開いた。

「この二人に、ついていくのか？」

「あ？　ああ、そのつもりだけど」

おい、と言うユギの突っ込みは無視された。

「……そうか。森の者たちは、色々考えるだろうな」

眼を伏せて言う老人は、本当に何かを考えているようだった。彼らは何故そこまでセキコを慕うのかは分からなかったが――ユギは何も言わずに、セキコと老人の会話を見守ることにした。

「あー、おい、村長」

セキコは困ったように頭をかき、後ろのユギとアノを仰いだ。アノは一つ頷き、黙る。ユギは眼を閉じ、腕を組んで顔を背けた。は

あ、とため息を吐き、セキコは老人と向かい合う。

「そんな考え込まないでくれよ。何も永訣の朝って訳じゃないんだし」

「渋いな、おい……」

「師匠静かに」

「こいつらの旅が終わるか、もしくはきりが良さそうな所で、私は戻ってくる。だから、なんだ、それまで頑張れ」

しどろもどろに、セキコは老人に言葉をかける。その声色から、彼女が困惑してるのがありありと伝わってきた。彼女自身、こういう別れの挨拶が苦手なのかもしれない。

やがて、老人が顔をあげた。皺くちやになった口が開く。

「お土産は」

「は？」

師匠、とアノが厳しい目つきで咎めてきた。しかしユギは驚きを隠せずに、老人の発した言葉に反応してしまった。慌てて、前に出る。

「ちょ、ちょっと待て。今あんたなんて言った？」

「お土産と言ったが」

「なんでそうなる!？」

「るっせえぞユギ。そういう決まりになってるんだ」

そう言うセキコの顔には、気まずさと恥ずかしさがないまぜになった複雑な色が浮かんでいた。お土産の請求。セキコの表情。未だユギには事がよく分からない。

ぐい、とTシャツの裾をひかれ、ユギは半ば強制的に後ずさる。眼を向けると、吊り眼になったアノが、言葉を鋭くして説教を垂れてきた。

「師匠何やってるんですか。人の会話に乱入しないって、母親から教えられていないんですか？ 折角感動のシーンだったって言うのに」

「お前にはあれのどこが感動に見えるんだよ」

その傍らで――セキコと老人は、話を続けていた。

「お土産。今度は何を買ってきてくれるんだ？」

「……うーん。滅びのピコちゃん人形とか」

「もう少し可愛げのある物がいんだが」

「だー、面倒くせえ。可愛げだア？ 村長、あんたそういう趣味じやなかっただろうが」

「狐たち全員の意思さ」

「……ああそーかい」

セキコは忌々しげに髪をかきむしり、大きくため息を吐く。そして、少し躊躇うようにした後、おもむろに小指を老人に向かって突き出した。

「……なんの真似だ？」

「指きりげんまん」

「子供かお前は」

「御年16だ。はん、ピッチピッチの幼女ってな」

にい、と邪悪な笑みを口元に浮かべ、セキコは指を前へ突き出す。その頬は薄い朱に染まっていた。老人は暫くセキコの顔を見つめ――そして、小指をだした。

「まあ、戻ってくるさ。安心しろ」

「元々心配はしていないさ。しているのはお土産に関してのみだ」

「あっそ。……指きりげんまん。嘘ついたら……」

「ついたら？」

「死ぬ」

「まあ、そうだな」

老人は、愉快げに口をゆがませた。

やがて、指を離す。それじゃあ行くぜ、とセキコが言った。老人は頷き、道を開ける。

「おい、てめえら。いつまで時空漫才やってんだよ」

「なんだよそのハイブリットな漫才は」

「格好いいですね」

「黙れ弟子」

一喝され、アノはやれやれと言いたげに肩をすくめる。セキコは振り返り、演説でもするかのように両腕を広げた。

「って事で、私もお前らに着いて行かせてもらうぜ。文句無いな？」

「私は大賛成だよ。ユギもいいよな？」

「何お前が主導権握ったような事言ってるだよ」

「まあてめえらが断ったとしてもついていくけどな」

ひはは、とセキコは笑う。そんな彼女を見て、ユギはため息を吐き、勝手にしてくれと、呻くようにして呟いた。

しかして、ユギとアノは新たな仲間、化け狐のセキコと共に、世界を滅ぼす旅を続ける。旅の目的地、エルトアの庭。創造主との邂逅は、一体何時になるのか。その答えを知る者は――少なくとも、ここにはいない。

真夏の草原を、彼らは歩く。

5（後書き）

第二章終。赤狐のセキコが仲間になりました。

《嵌りの森》のお祭りは恒例行事。秋の果実収穫の祝いとして毎年開催していますが、今回に限り、セキコが帰ってきたためその祝いとなりました。劇中の描写にもあるように、セキコは《嵌りの森》の中ではかなり高い立場に居る狐で、化ける能力も群を抜いています。

《聖歌隊》の章 1

黒髪の他称勇者、ユギには世界を滅ぼす為の力がある。

赤髪の化け狐、セキコには身体を変幻自在に変える力がある。

ならば、白衣を纏う他称勇者の自称弟子には、一体どのような力があるのか。

その単純な問いに、少女アノはどう答えるだろうか。

「……さあ？」

それは答えではない。

「冬だぜ」

「違う」

「海です」

「違い」

「戦いだー！」

「うるせえ！」

ヒルレイ東部に広がる広大な草原を、喧しく騒ぐ三人の少年少女が歩いていった。なだらかな坂を上り、小高い丘の上に出ると、足元にはゆるゆると茶色の道が伸びている。その先に、大きな湖と、その湖に寄り添うように作られた美しい街が見えた。

先頭を歩いていた赤毛の少女が、髪の間を生えた獣の耳をぴんと立て、口角を緩ませながら振り返った。

「リスポールが見えてきたぜ。相変わらず真っ白だなア」

「真っ白ですって？ どうせ私には敵わないでしょう」

「アノ、後ろ髪が汚れてるぞ」

「何処見てるんですか変態」

純白の白衣を纏い、端正な顔に薄い笑みを湛えた少女が、表情を変えぬまま最後尾の少年を罵倒する。

茶色のTシャツに黒い短パンという質素な服装の少年は、頭をかき、疲弊した表情で空を仰ぐ。

少年の名をユギ。白衣の少女はアノと言い、赤髪の人外の名をセキコと言った。彼らは今、ヒルレイとリテネを繋ぐ《嵌りの森》を抜け、湖の街リスポールを目指している最中であつた。

ニヒルな笑みを浮かべるセキコの隣に並び、アノはリスポールの全景を一望する。途端、短い感嘆の声がアノの口から漏れた。

「師匠師匠、あの街真っ白ですよ。まるで……いやなんでもないです」

「言いかけて止めるなよ」

「言ってもいいんですか？」

「やっぱりいいや」

「まるで師匠の頭みたいです」

「やっぱりいいって言っただろうが！」

声を荒げた後、気を取り直してリスポールを眺める。確かに、セキコやアノが言うように、リスポールの建物は全て白く塗り立てられている。潔癖にも見えるその外観は一種神聖な雰囲気漂わせていて、アノが驚きの声をあげるのも無理は無かつた。

「おら、さっさといくぞ。こちとら足がにゅーさんで一杯一杯なんだ」

「明日は筋肉痛ですね。師匠は大丈夫ですか？」

「まあ、なんとか」

微笑みながら様子を窺ってきたアノにそう答えると、露骨にセキコが反応を示した。ふん、と忌々しげに鼻を鳴らす。

「全く、今時の奴らは健康的でいいよなあ。私がためえらくらいの頃は、ずっと家の中で寝てたぜ」

「お前俺たちとそこまで年変わらないだろうが」

「あん？ お前もうおっさんじゃなかったっけ」

「どうしてそうなるんだよ」

「師匠は小さなおっさんですよ」

「お前は黙ってろ」

ゆるやかな勾配を降り続け、やがて平坦な一本道になった。からりと晴れた青空には雲ひとつ見えなかったが、時折り吹き抜ける涼しい風のおかげか、リテネの猛暑よりかは幾分楽な道程であった。アノとセキコは鼻歌でセツションをし、いつの間にかやら意気投合している。ユギは肩をすくめて、彼女たちの奇妙な友情の育みを眺めるのみである。

「おう、そーいやユギ」

リスポールまで後僅かというところで、アノと握手をしていたセキコが声を発した。

ユギは首を傾げる。

「なんだ？」

「すっかり聞き忘れてたが、てめえら、何のために旅してんだ？」

そう言ったセキコの表情は清しいまでに悪びれも無く、まるで近世前期にその名を馳せた大泥棒のようであった。肝心な所で抜けている。尤もこの娘の場合、いつだって螺子の一本か二本、どこかへ弾け飛んでいるのだが。

ユギは眼を瞑り、果たしてどう表現するべきか悩んだ。直球で行くのが一番簡単だが、その場合セキコがどのような反応を示すかわからない。それでいいんじゃないかと思うと同時に、得体の知れない恐れがあった。

それから、数十秒後。結局ユギは心を無にすることにした。

「俺たちは、世界を滅ぼすために旅をしてる」

「へえ」

セキコの反応は、思った以上に簡素なものだった。

ユギは肩透かしを食らった気分である。もう少し馬鹿にした反応をしてくると思っていたが、要らぬ心配だったのだろうか。だが、セキコはユギたちの目的地、エルトアの庭で働いていた経歴があるのだ。なにか特別な言葉を、返してきてもいい物だが。

すると、セキコが妙に真剣味を帯びた声で尋ねてきた。

「本気で言ってるのか？」

「ああ」

「……まっしろしろすけもか？」

「私は意見を持ちませんよ」

アノは即答する。眼を丸くしたセキコに、彼女はなんの躊躇いも無く続ける。

「私は、師匠についていくだけですから」

長い沈黙があった。セキコは何かを考え込むようにして下を向いている。アノはアノで普段どおり、能天気にな鼻歌を歌っていた。そんな二人を前にして、ユギはどこに眼を向けていいか分からず、地面に転がった石を蹴って気を紛らわしていた。

「……お似合いだよ、てめえら」

やがて顔をあげたセキコは、何の前触れも無くそう言った。ひはは、とだらしなく口元が弛緩する。

「世界を滅ぼす、ね。つまりあれか、アイリアを倒そうってか？」

「アイリア？」

「ああ、知らないんだったな、この油野郎が。アイリアってのは、エルトアの庭のトップ——この世界の創造主だ」

創造主、という単語にユギは顔を上げる。横目に入ったアノは、ユギと同じくセキコの顔を見つめていた。

「ユギ、てめえが訳分からんくらい強いってのは戦った時よく分かったが、多分、今のままじゃアイリアには勝てないぜ」

「またその話か」

「あん？」

「あ、いや、なんでもない」

ユギは慌てて言葉をはぐらかす。アノの視線がとても痛かった。セキコは一度振り返ってユギを見たが、特に言及もせず身体を戻してしまった。

「まあ、てめえらも馬鹿じゃないはずだし、そこらへんは分かっていると思うが」

「当たり前だろ」ユギは強く頷いた。アノはあらぬ方向を眺めている。

「ひはは、なんだなんだ、らしくもない話をしちゃったな。たまにはいいかな、こういうのも」

「ありがとうセキコお姉さん」

「幼女だっつってんだろ」

「だからお前はもう少し自分の発言に責任を持て」

「師匠が言うんですか？」

「お前が言うのかよ？」

湖の街、リスポール。名匠ランシードを中枢に発展が進んだその街は、ヒルレイの独自文化を存分に取り入れた、美しい街だ。

街は中央に近付くにつれ地面が低くなっている為、至る所に階段と坂が存在している。道の両端には小さな水路が流れ、一年を通して清潔感に溢れている。湖の隣に建てられた教会では、白い制服を身に纏った子供たちが、神聖なる歌の練習に励んでいた。

そんな街の一角。湖の教会から僅かに離れた場所に、白いホテルは建っている。リスポールに到着したユギたちは、まず初めにそのホテルの部屋を借りておく事にした。

「でふ。でふでふ」

「気色悪い声を出すな」

「てふてふが蝶々なら、でふでふは蛾でしょうね」

「話を広げなくていいから！　そしてその理屈はおかしい！」

部屋の窓際に置かれた椅子に座り――どうやらどの街に行ってもその場所が特等席らしい――、アノは変わらぬ微笑みを湛えている。訳の分からない呻き声を上げたセキコは、二つあるベッドの片方にうつ伏せに倒れ、気持ちよさそうに肢体を投げ出していた。

ユギは、アノと向かいあうように設置された椅子に腰を下ろす。窓の外に眼を向けると、眩しく太陽の光を反射する湖面があった。

白い鳥が、水面を切り裂くように飛行している。

「綺麗ですね」

同じように外を眺め、アノは言う。ユギは素直に頷いた。

「海にも行ってみたいんだけどな」

「うえみだと？」

「発音がおかしい」

がばり、と勢いよくセキコが飛び起き、窓際の二人を睨み付ける。何故か憤怒を映すその表情には、訳の分からない迫力が伴っていた。

「お前ら、私たち狐がうえみが大嫌いなのを知りながらそんな事をほざきやがるのか！」

「知らねえよそんなの」

「はっはーん、おいおい生姜野郎、私の水着姿が拝めないからってそんな露骨に残念がらなくてもいいんだぜ？ 大丈夫、近いうちに温泉イベントが待っているに決まってるんだ」

「お前は早く寝た方がいい」

「寝首をかこうって作戦だな！？ 面白い、出来るもんならやってみな紅生姜め！」

「もう野郎でもなんでも無くなっちゃいましたね」

「突っ込むべき所はそこじゃない」

「じゃあなんですか？ ああ、戦いの事でしたか」

「戻りすぎだ」

遠く、聖歌隊の歌声が聞こえた気がした。

《聖歌隊》の章 1（後書き）

第三章です。読み方はそのまま《せいのかたい》。

諸事情あって暫くまともに小説を書く時間が取れないので、更新が不定期になると思います。ご了承ください。数週間ほどで戻ります。

ヒルレイの民は肌の白い人が多く、男女共に容姿に恵まれています。手先が器用で、戦いによる興奮よりも、芸術による美しさを良しとする傾向にあります。

《嵌りの森》での騒動後、日を空けずにリスポールまでやってきた為――その日は結局、三人とも宿屋の部屋の中で休息をとることにした。

「私はいつでも歩けるけどな」

「私はいつでも歩けますけど」

「お前ら嘘が大好きだよなあ」

紅色のベールがかかったように、空にはのっぺりとした夕焼けが広がっていた。少しずつやってくる夜の影に、遙か遠くに見える山脈がよく映えている。湖の青い水面は、穏やかに波打ち、音を立てた。

室内では、セキコとアノが、それぞれ別の本を読んで暇を潰していた。アノが読書を好むのは知っていたが、まさかセキコもそういう趣味があるとは思いつかなかった。黙っていれば様になると言うのに、彼女は何処で道を踏み外したのだろう。暫く、真剣な面持ちで文面を追うセキコを観察していると、不意に彼女が顔を上げ、こちらを見た。

ユギは慌てて眼を逸らす。しかし、遅かった。

「変態がいるッ！ この部屋に変態がいるッ！」

「窓際にいるッ！ あの窓際に変態がいるッ！」

なんの打ち合わせも無くコンボを放ってきた二人の歪な友情には脱帽する。しかし、もう少しまともな方向でその特異性を発揮してほしいと、ユギは毎度の如く考える。

「……はあ」

騒ぐ二人を意識の外に除外する努力をしながら、ユギは深く椅子に身を沈めた。

翌日、三人は共にリスポール内の観光に出かけた。

世界滅亡の為に旅をする身でありながら、このような僻地で観光を楽しむのは甚だおかしい。そうユギは訴えたが、アノとセキコはその意見に猛烈に反対した。観光しないのなら旅に同行しないと、二人は仲良く声を揃える。アノは勿論の事ながら、セキコはエルトアの庭の情報を持っている存在だ。今更旅の仲間から外れてしまうのは非常に痛い。宿の部屋にて数十分、三人の話し合いは進み――結局、ユギが折れた。

当然と言えば当然の結果であった。

「とりあえず、街の中央に行ってみましょうよ」

今日も今日とてシミ一つ無い白衣を身に纏い、アノは上機嫌で先を行く。燦々と照りつける太陽の光もあわさって、その後ろ姿は輝いて見えた。気だるげに瞼を落とし、背中を丸めて歩くユギとは正反対である。

「おいおい、元気出せよ」ホテルで買ったお結びを頬張りながら、セキコはユギの背中を叩く。「レディファーストの世界だろ。そこらへん折り合いつけろって」

「弟子と狐が相手だとなあ」

「私たちが女じゃないとでも？」

「そういう意味じゃ……」

「男尊女卑もいい加減にしろよばあか」

「人の話を聞け」

ユギは肩を落とす。丸まっていた背中が更に丸みを帯びる。その姿を眺め、団子虫みてえだな、と言いつつ残してセキコはアノの隣へ歩いていった。

時間を空けず、ユギは身体を元に戻した。ぽきん、と背骨が乾いた音を鳴らす。我ながら何をやっているのかと、ユギは一人羞恥に悶えた。

「どうしたんですか、身体をシェイプして」

「してない！」

アノが振り向いて、怪訝そうにこちらを見ていた。誤魔化すように咳をしたユギは、ふとその手に握られた、黄色い装飾のなされた万華鏡に眼がいった。

「なんで万華鏡なんか持ってるんだ」

「これで遠くまで見られるかなって」

「お前万華鏡の性質を根本から履き違えてないか」

ユギの疑問に笑い声を返し、アノはそのまま走っていつてしまった。長い白衣を翻して走るアノに、リスポールの住民が奇異の視線を向けている。

なんだか今日のアノはいつにもまして快活である。良い事でもあったのだろうか、とユギは一人思考する。

街の中央につくまでにさほど時間はかからなかった。広場はやや混雑としており、雑踏の中で露天商が声を張り上げるのが聞こえる。宙に伸びる物干し用の紐には、衣装の代わりに万国旗のようなものが垂れ下がっていた。

「お祭りでもあるのか」

「あー。確か、この時期は丁度聖歌祭だったかな」

セキコがいつの間にか隣に来ていた。アノの姿は見当たらない。世話の焼ける弟子の姿を探しながら、ユギは「聖歌祭？」と質問を口にする。

セキコはすぐには答えず、手に持ったお結びを一口頬張った。米粒が咀嚼され、色の白い喉が動く。それからどんどん口は動き、男の握りこぶしほどの大きさがあったお結びが、見る見る内に小さくなっていく。

「向こうに教会があるだろ。そこで聖歌隊が聖歌の練習をしてんのよ。で、今度の祭りがその発表日って訳」

やがてお結びを食べ終えたセキコが、満足げに頬を緩ませて解説してくれた。

「たまたま《嵌りの森》のアレと被ってたようだな。でも、今の時期だとどの街でもこんなもんだぜ」

へえ、とユギは感心したように呟く。詳しいんだな、と続けると、彼女はまんざらでもなさそうに頭を掻いた。

「エルトアの庭に居た時は、仕事のせいでもとにかく世界中を回ってたからな。そこらへんの知識は頼りにしてもらってもいいぜ」

「そうなのか……意外な特技だな」

「もっと褒めてもいいんだぜ」

「やめておく」

ふと、広場の端に立つアノの姿が見えた。セキコと共に近付いていくと、彼女は街内看板のお知らせに眼を向けているようだった。

「アノ、何してるんだ」

「あ、師匠。セキコさん」アノが振り向き、二人を見て笑みを浮かべた。「これ、見てください。大変そうですよ」

そう言って、アノは看板に張られた一枚の紙を指差す。真っ白な紙の上に、太い字で「聖歌隊欠員募集」と書かれていた。

「おいおいおい」ユギは思わず呆れた声を漏らす。

「欠員か。まあ行事にトラブルはつき物だな」

セキコは腕を組み、まるで何度も見してきたことのように言う。彼女にとっては、実際に飽きるほど遭遇した出来事なのだろう。長い眉が、つまらなそうに下がっていた。

ユギは改めてチラシを眺める。欠員は一人。適正試験の後、合格ならば採用――。

顔を戻し、能天気そうに微笑むアノに向ける。

「それで、これがどうしたんだ」

「私、やってきてもいいですか？」

「はあ？」

ユギは顔をしかめた。唐突に何を言うのだと、呆れた声で言おうとすると、今度はセキコが発言する。

「いいんじゃないの、別に」

「いやちよつと待ちたまえよ」

「待てと言われなくてもどこにも行かないけど」

「んな事分かってる。そうじゃなくて、アノ、お前本気で言ってるのか？」

ユギは戸惑いのまなざしをアノに向けた。セキコの一言が、アノの勢いに拍車をかけていそうだったからだ。彼女は基本的に従順だが、一度走り出してしまふと止まらない。それを止める術が無い事を、ユギは身をもって知っている。

そしてユギの希望も虚しく、アノは力強く頷いた。

「だって面白そうじゃないですか。それに私、こう見えても歌唱力なら自信があるんですよ」

「それは確かにそうだが」

「あん？ まっしろしろすけ歌上手いの？ 世紀の首吊り歌姫と呼ばれたこの私よりも上手いの？」

「それ不名誉な呼称じゃねえのか」

ずい、と一步前に出て迫ってきたセキコに、アノは細い人差し指を向ける。その時の彼女の顔は、余裕げな自信に溢れていた。

「勿論です。古代のお茶の間歌姫と主に師匠に呼ばれたこの私ですから」

「呼んでない」

ユギは突っ込みつつも――内心、この件についてはそう悲観な考えは持っていないかった。

彼女が自負するとおり、確かにアノは歌がとても上手い。きちんと発声の訓練を受ければ、そのまま歌姫として通用するレベルの持ち主なのだ。

そのアノが聖歌を歌ってみたいというのである。個人的には是非とも聞いてみたい所だったが。

「……そんな事してる暇あるのかねえ」

ユギがぼつりと呟くと、アノは今朝と同じ反抗的な態度を見せた。「またそれですか。師匠、急いだってなんの得にもなりませんよ」

「そうだけどな。でも、俺らの旅はこんな事する為に――」

「おい、糠味噌野郎」

誰が糠味噌だ、とセキコを仰ぐと、彼女はユギのズボンを指差していた。正確にはズボンの右ポケット。そこには、彼らの旅を支える金の入った財布が収納されている。

セキコはズボンを指したまま、無表情で言葉を続ける。

「今、財布の中にいくら入ってるんだ」

「え。なんだよいきなり」それ以前に何故そこに財布があると知っているのか。

「昨日でめえが寝てる時に見たんだよ。で、いくらあるんだ？」

渋々ポケットから財布を取り出して、中身を確認する。財布の重量は羽毛程度にしかないのではないかと思うほどに軽く、そこにはこの世界で使われる共通貨幣が一枚、虚しく埋まっていた。

「……少ししか無いな」

セキコが財布の中を覗き込み、にやりと笑った。

「全然無いな。あの聖歌隊欠員の奴、上手く採用されれば結構な額が貰えるみてーだぜ」

「……ううむ」

顔を上げ、欠員募集のチラシを見る。下部にでかかどと、報酬はアンズ紙幣二十枚と書かれていた。一日三食三人分の栄養を摂取したとしても、一ヶ月は生きていける額だった。

「随分貰えるんですねえ」

「ヒルレイは金持ってるしな。それにこの街はヒルレイの中でも比較的豊かときた。紙幣の十枚や二十枚、どうってことないんだろうよ」

セキコが淡々と解説をする。アノは講義を受ける学生のように、真面目な顔でこくこくと頷いていた。

「……仕方ない、一度話を聞きに行こうか」

やがてユギがそう結論を下すと、アノは満面の笑みを見せた。相当嬉しいのか、ガッツポーズまで取っている。

「それでは、早速行きましようよ」

「そうだな。でも、もう少し落ち着け」

聖歌隊の練習場所は、湖近くにある教会。ホテルのすぐ傍だ。アノは瞳を希望に輝かせ、先頭を取って歩き始めた。それを追いかける形で、ユギとセキコの二人が歩く。

前に行くアノの白衣が、吹き抜ける風にはためいた。混雑した広場の中を、彼女はすいすいと進んでいく。まるで首輪を外された子犬のようだと、ユギは不躰な事を考えた。

隣にいるセキコが欠伸をもらった。

「元気だなあ、まっしろしろすけ」

「全くだ」独り言のように呟いたセキコに、ユギは頷きながら賛同する。

「普段からあんな感じなのか？」

「いや、そんな事は無い。《嵌りの森》の時のテンションが普通なんだが」

「ふうん。長年付き合ってそうだがなア、てめえら」

「あいつは謎が多いからなあ……」

ユギは視線を傾けて、空を見上げる。今日も雲一つ無い快晴だった。こう何日も晴れが続くと、苛立つとまではいかなくとも、なんだか不安を煽られてしまう。

再び顔を水平に戻すと、既に前方にアノの姿は無かった。

「……まあ、いいか」

彼女がやりたいと言うのなら仕方ない。

暫く、自由にさせてあげよう。

2 (後書き)

世界の通貨の話。

アンズ紙幣がこちらにおける千円札、シトロ金貨が百円玉、パラル銀貨が十円玉、タツノ銅貨が一円玉の役割を果たします。

勿論それ以上の額を持つ紙幣が存在しますが、この物語ではあまり登場しません。

この街は音楽の街だという。

湖の教会で、アノが聖歌隊の適正テストを受けている間、ユギはセキコからそんな話を聞いた。

ヒルレイの民は芸術を愛する人種だ。元々、全ての芸術の起源はヒルレイの地にあるだとか。セキコの饒舌から語られる芸術誕生の逸話は眉唾物だったが、その真偽を抜きにしても、彼女の知識量は並大抵の人間のそれではなかった。彼女の数少ない長所の一つだろう。

テスト開始からきっかり三十分後。教会の奥からアノと、白いドレスを纏った妙齡のシスターが姿を現した。

「お待たせしました」

静謐な泉を連想させるような、清楚な声でシスターは話す。常に微笑を湛えるその姿は、どこかアノと似通っていた。

「アノ様の適正テストの結果……アノ様には素晴らしい素質があることが分かりました」

「あ、そうですか」ユギは安堵のため息を吐く。心配していた訳では無かったが、それでも無事の知らせを聞くのは何よりも嬉しい。横目でアノを見ると、彼女は至って余裕げな表情を浮かべていて、少しだけ興ざめした。

長椅子に座ったままのセキコが、だらしなく身体を横たえながらシスターに話しかける。

「聖歌祭はいつからなんだ？」

「明後日です。もう時間はほとんど残ってないと考えていいでしょうね」

「明後日？ 随分唐突なんだな」

「貼り紙自体は、二週間前ほどから貼っておいたんですよ？ でも全然人がいらっしやなくて……今回アノ様が来て下さって、とて

も助かりました」

そう言って、シスターは隣のアノに眼を向ける。アノは一つ頷き、胸の前で手を合わせた。

「私も、一度やってみたいと思っていた事なので」

「はん。まあ心配は要らないようだな」両手で勢いをつけ、セキコは上半身を起こす。「そんなじゃ、私たちは失礼するか。行くぞユギ」

「ああ、そうだな。アノ、まあ、頑張ってくれ」

ユギはシスターに頭を下げ、それからアノに声をかける。アノは何も言わずに、微笑みを浮かべた。

「二日後を楽しみにしててくださいね」

「はい。では、俺たちはこれで」

シスターと挨拶を交し、ユギとセキコは教会を後にした。

「男と女の逢引ってさ」

「うん」

「俗に言うときさ」

「お前狐だよな」

「てめえ本当につまらない奴だな」

飛来するセキコの手腕を避け、ユギはふんと息を吐く。

「当たったらどうする」

「処理する」

「何を」

「お前の毛」

「毛!？」

二人は、ホテルへと戻る道をゆっくりと歩いていた。左を向けば湖と、その浅瀬で水遊びをする子供たちが見える。彼らの騒ぐ声がバックとなり、辺りには長閑な雰囲気漂っていた。

セキコが両腕を頭に回し、自らの後頭部に載せた。それから、彼女には似つかわしくない神妙な顔で、隣に居るユギを仰いだ。

「あー。んにしても、世界は平和だなあ」

「いきなりなんだよ」

「こういう場所に来るとよ。別にエルトアの庭で仕事してた意味なんて、ほとんど無かったんじゃないかって思うのよ」

ユギは一度怪訝そうな顔でセキコを見たが、結局何も言わなかった。欠伸をして、セキコが言葉を続ける。

「勿論エルトアの庭は必要なんだぜ？ アイリアがいなければこの世界は滅ぶからな」

「その部分なんだけど」

「あん？ 何処だ？ 私が可憐で最強ってどこか？」

「言ってねえだろそんなの」

アイリアがいなければ世界は滅ぶって部分だ、とユギが説明を入れると、セキコはいかにも面倒くさげな顔をしてユギを見つめた。

「なにてめえ、そんなの気になんの？ どこまでマニアックなの？」

全世界小説に段落付け選手権優勝者の私より無いわ」

「お前はもう消滅していい」

「ちなみに私の写真集の段落は300な」

「聞いてねえよ！ とうか随分多いな！」

「そりゃ小説だから」

「写真集じゃないのかよ」

「誰が写真集なんて言ったんだよ！ 馬鹿かてめえは！」

「ああもう分かったからその口を閉ざして黙れ」

そして願わくば窒息しろ。

ユギは絶望のため息を吐き、心を落ち着かせる為に何度か深呼吸を繰り返した。セキコは何事も無かったかのように眠たげな顔をして、浅瀬で遊ぶ子供たちを眺めている。

それから、さてと前置きを入れて。

「話を戻す。結局、アイリアが死ぬと世界は滅ぶって言うのは本当なのか」

「……まあ、本当らしいけどなア」

返事をしたセキコの口調は、どこかどこしかった。言うのを躊躇っている様な印象。構わずに、ユギは質問を重ねる。

「らしい、って言うのは、やっぱり正確にはわからないのか」

「そりゃアイリアはまだ死んでないからな。でも、本人が言ってたんだからそうなんじゃねえの」

「曖昧だなあ」

「私に言うんじゃねえ。ああ、そうだユギ」

ん、とユギはセキコを見る。湖を見つめて彼女は、頭にやっていた手を下ろしながら、やがてユギに眼を向けた。

「私、これから単独行動するから。夕方には戻る」

「そうか。でも何処へ？」

「湖の向こう」くい、とセキコは湖を顎でしゃくった。「あっちに小さな家が建ってるんだが、そこに友人が住んでてな」

「ふうん……狐なのか？」

ユギは彼女が指し示した湖の先を見つめながら、呟く。セキコはそれに肯定した後、楽しげに眼を細めた。

「ずっと昔から、あの家の中に籠っててな。自称、発明家」

「ありがちな」

「作ってるのは鏡だけだな」

「鏡？」ユギはセキコの言葉を反復する。セキコは一つ頷き、解説口調で言葉を続けた。

「小さい頃から鏡が大好きでなあ。昔は東方のエルディオって国に住んでたんだが、その国は鏡が邪悪を映し出す禍々しい器だと考えててな。泣く泣くあいっは、鏡に対してなんの規制もしていないこっちの国に移って来た訳だ」

「へえ……規制されてるってのに、よく鏡を好きになれたもんだ」

「そりゃ私が定期的に差し入れしてたし」

「お前は本当に消滅していい」

ユギはため息を吐く。セキコはひははと、いつものように口元を歪めて笑った。

ぱん、と両手を打ち、セキコがユギの前に躍り出たのはその時だった。

「そんじゃ、私は行くぜ」

「ああ。いつてらっしゃい」

言いながら、ユギは辺りを見回す。まだホテルは見えない。そんなに教会から離れてなかったはずなのだが。

そんなユギを前に、セキコは一度眉をあげた後、湖の方に身体を向けた。

そして、息を吸い込んだかと思うと――湖に向かって、身を投げた。

「……馬鹿か」

呻くようにして発せられたユギの言葉は、やがて訪れた水飛沫の音にかき消された。

少しして、ゆるく波打つ水面から、セキコの身体が勢いよく浮かび上がってきた。しかし、その瘦躯は明らかに今まで眼にしてきた彼女の物ではなく、まさしく魚のそれであった。

セキコは特にユギを見上げる事も無く、そのまま湖の中を泳いでいく。顔をあげ、彼女が進む方向に眼をやっても、湖の先には何も見えなかった。

暫くセキコの優雅な遠泳姿を眺めてから、ユギは肩をすくめて眼を地上へと戻す。弓なりに続く道の先に、ホテルの姿は見えない。

一体何が起きているのか。その答えは明白であった。

ユギは苛立ちに顔をしかめながら、後ろを向く。

数十メートルの距離をおき、そこに、真っ白なホテルが建っていた。

「……これは、無いなあ」

自分の不注意なのか、もしくはセキコが話し上手なのか。どちらでも良かったが、今のユギのにとってはただ虚しいだけである。

子供たちの騒ぎ声を聞きながら、ユギはとぼとぼとホテルへの道を歩いていった。

3 (後書き)

会話は踊る、されど進まず。

今回の設定話はお休みです。なんだか世界設定というよりかは、その回の補足といった感じになってますね。まあそれはそれで。

いざホテルに戻ってみても、暇を潰す手段はあまり多くなかった。暫くぼうつと窓からの景色を眺め、思い出したかのように昼食を取り、アノが先日読んでいた本を斜め読みし、やがて再び外へ出る事にした。自分の暇潰し能力の無さに驚きを感じながらも、どれだけ突っ込み役として日々働いているのかを考えると憂鬱になった。

すたすたとホテルを出て、空を見上げる。まだ太陽は高く空に浮かんでいる。時刻は午後二時くらいだ。セキコが帰ってくるのは夕方だと言っていたから、街の中を散策していればすぐに時間は過ぎるだろう。

先程セキコと歩いた道を、今度は一人で歩き始める。街の中央は人も多いだろうし、よしなし事をつらつら考えながら歩くのであれば、この道が最適だろう。面倒なアノもセキコもない。たつぷりと、身の回りで巡っている問題の事を考えられる。

エルトアの庭。それは果たして何処にあるのだろうか。このままセキコについていけば問題なく辿り着けると思うが、一体どれほどの時間を要すというのか。セキコは最後まで連れて行ってくれるだろうか。アノの記憶は戻るだろうか。俺は、本当に――。

「……駄目だな、一人で居ると馬鹿馬鹿しい事ばかり考える」

頭を振り、ため息を吐いたその時だった。

「あ、あの、すいません」

「はい？」

突然背後から声をかけられ、危うく変な声を出してしまう所だった。顔を強張らせない様にしながら、ユギはその場で振り返った。

ユギに声をかけてきたのは、まだ年若い少年だった。聖職者のような白色のローブとズボン、灰色の靴。ブロンドの金髪が光を反射してキラキラと輝いている。バランスの良い顔立ちをしており、その瞳は吸い込まれそうな深い青色を湛えていた。

この街の子供だろうか。それにしても奇妙な格好だった。

「あの、すいません」

「なんでしょう」

何故か二度同じ言葉を発した少年に、ユギは落ち着いて対応する。今までずっと訳の分からない奴らの相手をしてきたのだ。この程度の会話の弊害はへっちゃらである。

「僕の、恋愛のお手伝いをしてくれませんか!？」

そう考えた自分が馬鹿だった。

少年の名前はラットと言うらしい。

「まあ、偽名なんですけど」

「本名を言えよ……」

湖に面した道のベンチに座り、ユギはラットと話をしていた。出会い頭に相当大きなインパクトを与えてきた彼も彼だが、結局その変な子供の話を聞いている自分も大概変な奴だった。

「ええと、僕には好きな人がいまして。その人とお近づきになれるように、手伝って貰いたいなあって」

「なんで俺に声をかけたんだよ」

「暇そうでしたので」

「帰る」

「あ、ちょっと待ってくださいよ! 嘘に決まってるでしょう! その程度のフェイクにも気付けないとかどうかしてるんじゃないですか!」

「なんで堂々と馬鹿にしてくるんだよ! ふざけてんのか!」

「ジョークですよ、ジョーク。……実は僕、聖歌隊の一員なんです」

「へえ、聖歌隊……」

嫌な予感がした。

「はい。それで、今日新しく入ってきた人に、私の師匠はなんでも出来ますから困ったことがあったら頼りにしてくださいって言われ

たんです」

「あいつ後で殴る」

名前を聞かずとも分かる。

あの弟子は一体どこまで自分に厄介事をふっかければ気が済むのだろうか。

ラットは一度俯いたが、やがて不安げな表情でユギを見上げた。

「手伝ってくれないんですか？」

「……俺は暇じゃない。この街にだって後二日しかいられないんだからな」

「それなら聖歌祭には参加するんでしょう？　お願いです！　あの人を聖歌祭につれてくるだけでいいですから！」

「いや待て、あの人って言うのは何処に住んでるんだよ」

「湖の向こう側に、小さな家があります。そこに住んでるんです」

「え」

「へ？」

ユギは硬直し、ラットは素っ頓狂な声を出した。ユギの顔がみるみる険しくなり、そして、元に戻る。

「湖の向こう側と言ったか」

「は、はい」

「本気か？」

「本気です！」

「分かった。もしかしたら、どうにか出来るかもしれない」

「本当ですか？　感謝しま——」

「ただし」

ユギは立ち上がり、ラットの前に立った。口をゆるめたまま静止した彼に、釘を指すような口調で言う。

「後悔するなよ」

「は、はい」

たじろいたラットを見、ユギはため息を吐いた。成功するとは思えないが、やってみるだけやってみよう。セキコは協力してくれる

だろうか。

「そりゃ無理っぽいぜ」

「即答かよ」

太陽が沈み、午後七時を廻った頃にセキコは帰ってきた。

セキコは疲れた顔をしてベッドに座り込み、髪をくしゃくしゃと掻き回した。眼に力が無い。次いで発せられた声も、いつもと比べどこか覇気が無かった。

「あいつひねくれ者だし。あんま他人に興味持たないんだよな」

「狐は性格が捻じ曲がった奴ばっかりだな」

「てめえみたいにな」

「何同類扱いしてんだよ」

ユギは窓の外に広がる湖に眼を向けた。夜の暗闇の中、遙か遠くに、小さな白い灯りが見える。

ふぁ、とセキコが眠たげに欠伸を漏らした。

「まあどうせ明日も暇だしなあ、ためしに行ってみるか」

「それは助かる」

「勿論てめえもついてこいよ」

「え、なんで」

「なんで私だけ痛い思いしなきゃいけないんだよ」

「は……？」

こいつは何の話を聞いていたんだ。

そう思い話の齟齬を修正しようとした直後、部屋の扉が勢いよく開き、満面の笑顔を湛えたアノが帰ってきた。

「ただいま戻りましたよ、師匠、セキコさん」

「ん、おかえり」

「よし来たまっしろしろすけ、歌聞かせろ」

「お前はとりあえず寝ておけ」

アノは普段通り真っ白な白衣を着ていたが、その手には聖歌隊の

物と思われる真っ白な衣服があった。広げると、やはりラットが着ていたローブと同じ物のようだった。

アノは微笑みを浮かべ、誇らしげな口調でユギに言った。

「凄いでしょう？ リスポールオリジナルチャーチクアイアローブです」

「長えよ」

そんな名称を覚える前に歌詞を覚えろ。

「これを着るだけでもう聖歌隊の一員ですからね。名誉な事ですよ、これは」

「そう言うもんなのか？」

「元々聖歌隊は位が高いんだぜ」セキコがベッドに寝転がりながら、豆知識を口にする。「なんたって《神の歌》を歌うんだからな。その一員になるってのは、勿論凄い事なんだよ」

「成程、流石セキコ先生」

「おい授業料払えよ」

「なんでいきなりそういう話になるんだ」

唐突に強い風が吹き、ユギたちの衣服をはためかせた。窓を閉め、鍵をかけると、窓は叩きつけられる風にがたと揺れていた。その様子を見て、セキコは独り言のように言う。

「そーいや夕飯食ってないな」

「話が凄い勢いでつながってないんだが」

4（後書き）

長らくお待たせしました。でも短めです。申し訳ない。話自体は淡々と進んでおります。

神様に仕える者たちについて。

複雑な上下関係が有りそうに見えて、その実非常に簡単です。最も神に近いとされるのは法都アルヴェリ近辺の大聖堂に勤める聖職者たちであり、彼らの権威は首都から離れるごとに小さくなっています。次に力を持つ聖歌隊は各教会に一組は存在しますが、これも首都から離れることに弱まっていきます。最下位に当たるのは庶民信仰者たちで、彼らの権威は大凡フラットです。

翌日。リスポール滞在三日目の朝。

聖歌の練習をしに教会へと出かけていったアノを見送った後、ユギとセキコは湖の向こうに存在する小屋へと向かう為、リスポールを出た。

天候は案の定快晴。ここまで来たら聖歌祭本番である明日まで晴れていてほしいと願うばかりである。また、昨日の夜から引き続き、風が強い一日だった。

風が吹き抜ける草原を歩きながら、二人は雑談を交わす。

「こんな朝からお邪魔して大丈夫なんだろうか」

「ん、あいつ三日は寝ないでいるから平気だろ」

「生活のリズム狂ってないかそれ」

「私は昔一週間寝ないままでいられたぜ。おかげで眼は真っ赤顔も真っ赤で文字通り赤狐になっちまってな。あれは辛かった」

「寝ろよ」

大きな湖を回り込むようにして数分。ユギから見て左斜め上の方
向に、煙突からぼうぼうと煙を昇らせた小屋が見えてきた。あれが
セキコの友人が住んでいるという家ようだ。あんな場所に一人で
住んでいて、不便ではないのだろうか。食料はどうしているのだろ
う。色々と尋ねてみたい事は多かったが、突っ込んではいけないよ
うな雰囲気漂わせている。一言でまとめれば、酷く現実離れして
いる光景だった。

「ちなみにだが、友人の名前はシルルな」

「そうか。どんな人なんだ？」

「気まぐれ」

「ひねくれてるんだっけか」

「厄介な具合にな」

セキコは腕を組み、難しい顔をして言う。

「私は付き合い長いし大丈夫だろうが、てめえは少し気合入れてかないとやばいぞ」

「……昨日も思ったんだが、なんかお前勘違いしてないか？」

「私が間違えたことなんて一度でもあったか」

「お前の中では無かったんだろうな。俺はそのシルルって人を聖歌隊につれて行きたいだけなんだぞ」

「知ってるよ。その上で注意しろっつってんだ」

馬鹿にするようにセキコは笑い、ユギを見た。細長の瞳が、刀身のように鋭くなっていく。

「あいつはそういう奴なんだ」

「……つまるところ、こちらの要求に応じてくれるのは、なんらかの条件を満たしてからって訳か」

「さっきからそう言ってるだろうが」

ユギは肩を落とし、今頃聖歌の練習に励んでいるであろうラットとアノを恨んだ。何処に行っても面倒事は待っている。本当に勇者になってしまったような気分だ。

「なにしょげてんだよ、この天下のセキコ様がいるだろうが。泥船に乗った気分でいろって」

「沈んでどうすんだよ」

まるでフォローになっていないセキコの言葉を一蹴し、ユギは深くため息を吐いた。

それから数分と経たずに、二人は小屋の前までやってきた。木造の小さな壁の向こうからは、なにやら焦げてくすんでしまったような匂いがした。不定期に吹く風がその匂いをまとめて吹き飛ばしていくが、また暫くすると同じ匂いが漂ってくる。セキコが一步前に出て、小屋の扉を荒々しく叩くと、小屋の中から若い女性の声がした。

「セールスはお断りだよー」

そこだけやたらと現実的だった。

「私だ。セキコだ」

セキコは声を張り上げ、そう言った。直後、小屋の中からの声からとげとげしさが消え、代わりに訝しむような声色に変化した。

「え、セキコ？ 今日も来たの？」

「ちよつと用事があってなー。昨日話をした人間も来てるんだぜ」

「ああ、そうなの。今開けるから、少し待ってね」

セキコが一步後ろに下がってから暫くして、小屋の扉が開かれ中から白いフードを被った女性が顔を出した。耳の後ろから垂れた髪は、陶器のような白銀色に染まっている。眉が長く、眼が細い。猫のような顔をした女性だった。

彼女はセキコの姿を確認した後、その隣に立つユギを見て、興味深げに眼を輝かせた。

「本当だあ、人間ね！　なんか歪な感じがするけど、元々は真っ当な人間のようなねえ」

楽しげに声を張り上げる女性に、ユギは一つ礼をした。

「どうも、初めまして。ユギと言います」

「話は聞いてるよ。エルトアの庭を目指してるんでしょ？　勇者くん」

「あなたもエルトアの庭の事を知ってるんですか」

「そりゃ当たり前じゃない。常識でしょ、常識」

こんな隠者の生活をしてる人に言われていいような台詞では無かった。

ユギが肩をすくめていると、セキコが無言で女性の横を通り小屋の中へと入っていった。数歩歩いたところで振り返り、ひははと笑う。

「立ち話もあれだ。中に入って話そうぜ」

「あら、そうね。でもそれはあたしの台詞だと思っただけ」

「この家を建てたのは誰なんだ？　あん？　言ってみろ！」

「あたしでしょ」

女性はやれやれと言いたげに苦笑し、ユギに眼を向けた。

「あんなのと一緒に旅をして、疲れない？」

「元から疲れる事ばかりですから」

「気丈なんだね」

女性は微笑みを浮かべ、手招きをしながら小屋の中へ戻っていた。

また凄そうな人だなあと考えながら、ユギは女性の後に続いた。

小屋の内装は至ってシンプルであり、セキコの話からユギが考えていたような個性の色は見られなかった。ただ、部屋の片隅には古びた階段があり、小屋の外で嗅いだ焦げるような匂いは、その奥から漂ってきているのだと分かった。

さてと、と女性が手を叩き、被っていた白いフードを外した。白銀色の髪の間から、セキコと同じベージュ色の耳がのぞいていた。

「あたしの名前はシルル。セキコから聞いているかしら」

「まあ、一応」

「良かった。スムーズに話が進むものね」

「私に感謝してほしいものだな」

「あんたさっきから凄い小物臭がするわよ」

「そういうてめえは酷く鉄臭いぞ」

「そりゃあ鏡を作ってたんだもの」

ふん、とセキコは鼻で笑い、そっぽを向いた。なんだか機嫌が悪そうだったが、今その事を口にするのは躊躇われた。ユギは眼をセキコからシルルに移し、口を開く。

「今日はちょっとした頼みがあって、来たんですけど」

「頼みごと？ 鏡でも作ってもらいたいの？」

「いえ、そうじゃなくて」

聖歌祭に来てほしいと言う旨を簡単に伝えたと、シルルは少し困ったような表情をして、小首を傾げた。ふさふさの耳はしなびたように垂れ下がっていた。

「面倒くさいな。たかだか普通の人間の為に湖を渡るだなんて」

「てめえユギだって普通の人間だぞ」

「あんたその普通の人間に負けたの？」

「だからそれはユギの反則負けだっつってんだろ」

眉を吊り上げて反論するセキコに、シルルはまあまあと言うように手を前に出した。なんだかとても手馴れた動作だった。

ユギは一步前に出て、シルルに交渉を申し出た。

「あなたが、なんらかの条件を満たさなければこちらの要求に応じてくれないのは分かっています。可能な範囲であれば出来る限り実行する覚悟も、こちらにはあります」

「ふうん。分かっているのね」

シルルはニヤリと、怪しげに口元をゆるませる。そして、右手の人差し指を上に向け、くいくいと左右に振った。

「じゃあ、こうしましょ。今から二人に、あたしの新作兵器の実戦テストをしてもらうわ」

「兵器？」

「もし二人があたしの兵器に勝てたら、あたしはあなたたちに従ってリスポールの聖歌祭に行つてあげる。勿論負けたら何もなし。どうする？」

「二人って、私も参加しろってのか」

非難の声をあげるセキコに、シルルは口を尖らせて言う。

「当たり前じゃないの。あんたもユギと同じ意見なんでしょ？」

「決してそういう訳じゃないが……全く、仕方ねえな」

面倒くさそうに頭を振り、セキコはおもむろにユギの服をつかんで引っ張り始めた。うお、とユギは驚きの声をあげ、即座にセキコの腕を跳ね除けた。

「何をするんだ！」

「何って、テストだろ」

「そんな事は分かっている。……けど、兵器って一体」

「兵器は兵器。鏡のな」

「……鏡？」

ユギは眉を顰める。それがどういう意味かを尋ねるより先に、シルルが答えを急かすように言う。

「で、どうするの？ 本当にテストを受けるの？」

「受けます！ でも、その兵器ってのは」

「それはお楽しみよお」

実戦にお楽しみも何もあるのだろうか。そんなユギの心中もいざ知らず、シルルは彼に向かってウイंकをすると、焦げた匂いが漂ってくる階段へと向かっていった。セキコが何も言わずにその後ろにつき、ユギも二人にならうようにして、階段を降り始めた。

階段はどうやら小屋の地下に続いているようだった。崩れないように頑丈な木で補強された壁に手をつき、天井の低い道を降り続ける。人一人分のスペースも確保されていないような狭い通路を照らすのは、天井にぶら下がった小さなランタンだけだった。前を歩く二人の顔は窺えず、とてもじゃないが雑談が出来る雰囲気ではない。どうしてこんな事になっているのかと、改めてユギは絶望を感じた。やがて階段を降り終わると、急に広い空間に出た。鍛冶に必要な品がいくつも置かれており、まるで工房のような部屋だった。壁には物々しい岩石が露出しており、それに覆い被さるように、シルルが作ったであろう鏡が並んでいる。中には全面鏡で出来上がった甲冑のような物もあり、シルルの並大抵ではない腕を窺うことが出来た。

「随分と物珍しげに眺めてんな」

不意に前から声をかけられ、ユギはそちらに眼を向けた。声をかけてきたセキコはひははと笑いながら、壁にかけられた鏡——その中にある、巨大な鏡甲冑——を指指した。

「私たちがやりあうのはあれな。鏡装甲。格好よく言えばミラージュナイト」

「勝てる気がしないんだが」

「ちよっとセキコ。ネタバレしてどうすんのよ」

振り返ったシルルが、白い手を伸ばし勢いよくセキコの頭をはた

いた。セキコはなんてこと無さそうに体勢を立て直し、シルルと向かい合う。

「別にいいじゃねえか。どうせ私も戦わなきゃいけない訳だし」

「それとこれとは別でしょう。あたしはユギ君を驚かしたかったんだから」

「フエアな戦いにしたいんですけど」

「と、意味不明の供述をしております」

「捜査は今後難航していく見通しです」

「帰っていいかな」

やがて、部屋の隅にまで辿り着いた。壁には大きな門が立っており、その扉は硬く閉められたままだ。シルルが門の前で立ち止まり、なにやら扉を開ける作業に没頭している内に、ユギはセキコから可能な限りの情報を引き出しておくことにした。

「相手は鏡な訳か」

「鏡って言ったたらあれだな。金属体」

「殴ったら痛そうだな」

「てめえ痛覚とかあんの？」

「俺は人間なんだが」

「私は狐だぞ」

「知ってるよ。なんでそんな誇らしげなんだよ」

テンションのおかしなセキコとは、まともな会話が出来るように無かった。どうしてこう肝心な時に役に立ってくれないのだろうか。

「ようし。開いたよ。この中が、テスト会場ね」

楽しそうなシルルの声と同時に、前方の門がゆっくりと開いた。扉の向こうから冷たい風が流れ込み、ユギの髪を弄んでいく。まるで地獄のようだ。頭を抱えたい衝動と戦いながら、ユギは戦いの舞台へと、一歩ずつ近付いて行く。

「ようこそ、あたしの世界に」

そう言ったシルルの顔は、閉じていく門のせいで、確認することは出来なかった。

5 (後書き)

一様に鏡と言っても種類があり、人外の力を持つシルルの作り出す鏡は、極めて特殊な物が多いです。

彼女は自ら作り出した鏡の兵隊を兵器と呼んでいますが、実際作っている理由は趣味以外の何物でもありません。

ごうごう、と壮大な音を立て、後方の門が完全に閉ざされた。この空間は今まで歩いてきた地下室と違い、まるで別次元に飛ばされてきたような印象を受ける。壁、床、天井は薄緑色に光り、辺りには岩場が乱雑に広がっている。そこだけ見れば異国の溪谷にでも足を踏み入れたようだ。風は無いが空気はひんやりとしていて、地面の砂はさらさらに乾燥していた。

ユギは辺りをじっくりと見渡した後、ぼうっと突っ立ったままのセキコに声をかけた。

「これ、どうなってんだ」

「てめえを馬鹿にしてる」

「なんか機嫌悪いね」

「こちとら貫徹なんだよ。文句あつか」

「だから寝ろよ」

ぶいん、と不可解な音がして、宙からシルルの声が聞こえてきたのはその時だ。

「二人とも元気？ そろそろ始めても大丈夫かしら」

「さっさとやりやがれ、電源コード引っこ抜くぞ」

「これ無線通信だし。電源コードとか無いし」

「はん、上等だ！ いつでもかかってきなァ！」

「お前は普通の会話が出来ないのか」

野獣のように牙を剥き出したセキコに、何を言っても意味は持たないようだった。獲物を刈り取るかのように伸ばされた腕は、既に変化が始まっている。液体のように形を崩し、スライムのように混ざり合いながら再構築されていく。《嵌りの森》で戦った際に見た、黒色の剣だ。

「じゃあ、始めるね」

そう、頭上からシルルの声が聞こえてきた瞬間。

高く背を伸ばした岩場の向こうから、鏡の鎧を纏った兵士が三体、異様な素早さで飛び掛ってきた。

「猿かよ」

タイミングを合わせ、飛来する鎧の脇腹辺りを蹴り飛ばす。金属のぶつかる高音が鳴り響き、衝撃を受けた鎧は為す術も無く吹っ飛ばされた。

セキコに眼を向けると、ユギの方に向かってこなかった二体の兵士が、彼女の足元に倒れていた。うつ伏せになった身体を乱暴に蹴りながら、観察するようにしげしげと眺めている。至って余裕げだ。
「これ、どういう仕組みなんだ？」

「魔兵器だな」

「まへーき」

「人造の生命を埋め込まれた意志を持たない無機物。魔物とは多くの点で異なる」

「ミラージュナイトねえ」

「どうあれ弱けりや意味ねえぜ」

ふん、と鼻で笑いながらそう言って、セキコは宙に向かって声を張り上げる。

「おい、汁！ さっさと次を出しやがれ！」

「あらあ、やっぱり楽勝なの？ 仕方ないわね」

残念そうなシルルの声が終わると同時に、岩場から再び兵士が飛び出してくる。しかし先程よりも数が多い。顔を上に向けると、岩場の上に大量の兵士たちが群がっているのが見えた。

「あの汁女め、物量作戦に出やがったか」

「どうでもいいけどその呼称はどうかと思う」

「戦闘中だぞ、私語を慎みたまえ」

「そうですね先輩」

鏡の兵士たちの動きはただ飛び掛ってくるだけの単調な物だったが、その片手には細身の剣が握られている。あまり大振りの動きをする訳にもいかなかった。蹴っても殴っても、岩場の上から次々と

兵士は追加されていく。セキコの言う通り、本当に数で押す作戦に
来ているようだ。

意志の無い生命から繰り出される剣戟を交わし、ユギは再び岩場
の上に眼を向ける。兵士たちの数は減らないどころか、時間が経て
ば経つほど増えているようだ。思わず舌打ちを漏らし、楽しみに黒
色の剣を振り回しているセキコに声をかける。

「おい、セキコ！ この状況どうにかできないのか！」

「どうせ倒しきらなきゃ終わらねえだろうが」

「それはそうだけど！」

突進してきた兵士の身体を蹴り上げる。足先から衝撃が伝播し、
直後バネのように放出される。吹き飛ばされた兵士は後ろに犇く兵
士たちを巻き込みながら、後方へと姿を消した。ユギは即座に足を
回し、接近してきた兵士に同様の一撃を喰らわせる。

これではキリが無い。

倒されていく兵士たちを見ながら、そう思った時。

「中々苦勞してるみたいねえ」

唐突に、シルルの声が響き渡った。

「でも、結構な数で攻めてるんだけど。二人とも、疲れてる？」

「あん？ てめえは私を誰だと思ってんだ！ てめえの名付け親だ
ぞ！」

相変わらずのセキコの戯言に、シルルは一切動じない。

「全然大丈夫のようね。それじゃあ、本番と行きましようかあ」

「本番？」

どうやらこの猛攻は戯れでしかないようだった。何処からシル
ルがくすりと微笑むのが聞こえ、それから数秒と開けずに、シルル
の心から楽しんでいるような声がする。

「あたしの最高傑作よ。頑張って壊してね」

そう、言い放つ。その直後だ。

《嵌りの森》で起きたような地響きがして、轟音と共に兵士たち
が出現した岩場が崩壊した。もうもうと土煙が上がり、兵士たちが

その中へと消えていく。辺りを見れば、今まで規則的にユギに襲い掛かってきた兵士たちが、何かに怯えるように逃げ出していた。

「なんだなんだなんだこれは。あの汁、何考えてやがる」

ユギと同様に兵士たちから解放されたセキコが、依然として続く震動も意に介せずユギの方へ近づいてきた。しかしその表情は険しく、鋭い。見ると、彼女がいつも身につけている黒装束の裾の一部が、剣で切り裂かれてぼろぼろになってしまっていた。

セキコはため息を吐き、その場に座り込む。

「最高傑作ってなんだ？」

「さあな。しかし随分登場に手間をかけるな。やっぱり龍でも出てくるのか」

「やっぱりってなんだよ」

「私は知らん。シルルに聞け」

「言ったのお前だろうが」

ユギは顔をしかめ、土煙の中から何かが現れるのを待った。工房に置かれていた鏡、そして今まで襲い掛かってきた兵士たちの出来を見れば、シルルが鏡製作者としてどれほどの腕を持っているか、想像するのはあまりにも容易い。そんな彼女が最高傑作などのたまうのだ。果たしてどれほどの兵が出てくるのだろうか。

「ん。なんかでけえのいるな」

そんなセキコの声に反応し、顔を上げると。

ずん、という重い震動と共に、土煙の中から、巨大な鏡の装甲が現れた。

規格外の大きさだった。それは、今までその場所にあった岩場と同じくらい。言うならばゴーレム、か。強固な装甲を身に纏った、銀色の巨人だ。

ユギは暫く呆然として巨人を見上げていたが、やがて我に返り、慌てて隣のセキコを仰いだ。

「なんだ、あれは」

「封印された悪鬼……？ あ野郎、そこまで腕をあげてやがった

のか」

「悪鬼？」

「ああ。かつて勇者によって封印された暴虐な魔物だよ」

「その話、本当なのか」

「嘘に決まってんだろ」

「お前せん妄でも発症してんのか？」

ユギが向ける呆れた眼に反応もせず、セキコは勢い良く立ち上がった。そして乱暴に隣の少年の腕を掴み、立ち上がらせる。ぐんと上昇する視界に驚きの声をあげ、ユギはよろめきながらセキコを睨みつけた。睨まれた彼女は、危機感などまるで無さそうにひははと笑い、

「さてどうすっかな、これ」

そう言った。

ユギは言葉を返さずに、こちらへゆっくりと歩いてくる巨人に眼を向けた。

巨体だからこそ存在する、圧倒的な存在感。あの身体に意志は無いと分かっているけど、どうしてもこちらを殺そうと言う明確な殺意を感じてしまう。

戦いが始まる前、シルルは確かにテストと言った。その言葉が真実なら、殺されるような事はない。精々怪我をする程度。前座である兵士たちとの戦いも、そうだった筈だ。

しかし——まるでユギの心中を読み取ったかのように、セキコは頭を横に振った。

「あいつらは本気で殺しに来るぞ。シルルは容赦なんて言葉しらねえんだからな」

「それはお前が死に掛けていたとしても、助けないってことなのか」「当たり前だろ。今まで何度死にそうになったと思ってやがる」

冗談にならない。ユギは軽く眩暈を感じていた。

6 (後書き)

二カ月越しです。しかし短い。しかも話進まず。

シルルの鏡製作によって作られた装甲たちは、意思をもっているが作り手に絶対の忠誠を誓っています。人形のようなものでしょうか。

鏡製作の歴史は浅く、その技術を持つ者は世界にごく僅かしか存在しません。その中でもシルルは全て独学により技術を得た、数少ない貴重な人材だったりします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600m/>

世界は僕の手で滅びる

2010年10月8日12時23分発行